

宗教改革時代の印刷物を 分析するための視角

—— カールシュタット「天国と地獄の馬車」
(1519 年) を中心にして¹⁾

永 本 哲 也

1 はじめに

アンドレアス・ルドルフ・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタット Andreas Rudolff Bodenstein von Karlstadt (1486–1541) が、ルーカス・クラナハ（父） Lucas Cranach の手による挿絵がつけられた大判のビラ「天国と地獄の馬車」を出版したのは、1519 年の春であった²⁾。このビラが出たのは、ヴィッテンベルク大学の神学者マルティン・ルター Martin Luther が 1517 年

-
- 1) 本稿は、「獨協大学国際共同研究主催ワークショップ ドイツ・ルネサンス芸術の研究——ドイツ・ルネサンス美術における革新性（イノベーション）とは何か III」（於：獨協大学 2019 年 3 月 22 日）の講演原稿に大幅な加筆・修正を行ったものである。
 - 2) カールシュタットの「天国と地獄の馬車」については以下を参照。Erwin Mülhaupt, Karlstadts „Fuhrwagen“. Eine frühreformatorische „Bildzeitung“ von 1519, in: *Luther* 50, 1979, S. 60–76; 小田部進一「初期宗教改革における新しい信徒像——アンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタットの木版画ビラ『馬車』（1519 年）を手がかりにして——」『神学研究』52、2005 年、115–128 頁; Lyndal Roper and Jennifer Spinks, Karlstadt' Wagen: The First Visual Propaganda for the Reformation, in: Bridget Heal and Joseph Leo Koerner (eds.), *Art and Religious Reform in Early Modern Europe*, Hoboken, 2018, pp. 18–47. 「馬車」の画像と書き起こされたテキストは、アウグスト公図書館 Herzog August Bibliothek (HAB) のデジタルライブラリーで参照できる。ここには Alejandro Zorzin による詳細な解説も付け加えられている。(http://dev2.hab.de/edoc/view.html?id=kgk_120_transcript : 2021 年 1 月 2 日閲覧)

秋に『95 箇条の提題』でローマ・カトリック教会の贖宥に関する教えや実践を批判した後、教会との対立を深めていた時期であった。この後ルターや彼を支持する改革者、諸侯、諸都市は、カトリック教会を離脱し、ルター主義に基づく新しい教会を築いていった。ルター派教会を国教とする支配領域は、神聖ローマ帝国の諸領邦・都市を越えて、デンマークやノルウェー、スウェーデンといった北欧諸国にまで広がった。ルター以外にも、チューリヒのフルドリヒ・ツヴィングリ Huldrych Zwingli、ジュネーブのジャン・カルヴァン Jean Calvin などの数多くの改革者が現れ、さらに 1534 年にはイングランド国教会が成立するなど、ヨーロッパでプロテスタント教会を公認教会とする支配領域が拡大していった。

このように宗教改革は、急速にヨーロッパの広範囲で多くの人々を引きつけ、行動させ、新しい教会を次々と生み出した巨大な宗教運動であった。宗教改革の成功の重要な要因として伝統的に歴史学研究の中で強調されてきたのが、活版印刷術の影響力の大きさである。つまり、活版印刷術によって書籍、パンフレット、ビラが大量に印刷され、ヨーロッパに広がる書籍流通網を通じて販売され、多くの人々に読まれたために、宗教改革思想が急速に広まったというのである³⁾。このようにメディアによってつくり出されたという性格が強いために、宗教改革は「メディア・イベント Medien Ereignis / Media Event」と呼ばれることもある⁴⁾。カールシュタットの「天国と地獄の馬車」は、まさ

3) 活版印刷術の果たした役割の大きさを強調する代表的な研究としては、以下が挙げられる。E. L. アイゼンステイン著、別宮貞徳監訳『印刷革命』みすず書房、1987 年、157-199 頁。

4) 宗教改革を「メディア・イベント」として理解する研究には以下が挙げられる。Berndt Hamm, Die Reformation als Medienereignis, in: *Jahrbuch für biblische Theologie* 11, 1996, S. 137-166; Marcel Nieden, Die Wittenberger Reformation als Medienereignis, in: *Europäische Geschichte Online (EGO)*, hg. vom Leibniz-Institut für Europäische Geschichte (IEG), Mainz 2012-04-23. URL: <http://www.ieg-ego.eu/niedenm-2012-de> URN: urn:nbn:de:0159-2012042305 [2019-05-12]. ここでのメディア・イベントは、近代的なメディア環境を前提としているメディア研究での用法とは必ずしも一致していないように思われる。吉見俊哉によれば、メディア・イベントという概念は、新聞社や放送局など、企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されていくイベント、媒体としてのマス・メディアによって大規

しく宗教改革という「メディア・イベント」を生み出した様々な印刷物の一つだと言える。

こうした印刷物を分析する方法は様々である。神学的な印刷物に関しては、その思想をはじめとした本文の内容を明らかにしようとする神学・思想史的分析が必要となる。「馬車」のように挿絵がついている印刷物は、その挿絵に込められたメッセージや図像としての特徴に着目する美術史的な分析がなされねばならない。しかし、印刷物を分析する際には、それ以外にも多様なアプローチが存在している。本稿では「馬車」という作品そのものの分析を主眼にはおかず、作者や作品の歴史的背景や印刷物を分析するための視角を呈示することで、間接的に「馬車」という作品への理解を深めることを目的とする。

その際、「馬車」の幾つかの点に注目しながら、歴史学から見た宗教改革と印刷物の関係を概観する。一つ目に、「馬車」の著者であるカールシュタットという人物と出版年である1519年という年が、宗教改革史の中でどのように位置づけられるかを確認する。二つ目に、「馬車」のような活版印刷術によって生み出された印刷物の特徴を、書籍市場、印刷物そのものの性格という二つの観点から明らかにする。三つ目に、宗教改革期のメディアやコミュニケーション全般の中に「馬車」のような印刷物を位置づける。後述するように近年の宗教改革研究は、印刷物を口頭のコミュニケーションを含めた他様なコミュニケーションを形作る一要素だと理解しているためである。以上の三点に注目し、印刷物を分析するための視角を概観することで、様々な分野の研究者が

模に中継され、報道されるイベント、メディアによってイベント化された社会的事件の三つの重層的意味が包含されている。吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』同文館出版、1996年、3-30頁。それに対し、ハムは、特定のコミュニケーション方法や形態の効果を通じて形作られたことを理由に、宗教改革を「メディア・イベント Medienereignis」と呼んでいる。Hamm, S. 157. ハムは自身が使う用語の定義を明確に行っていないが、彼の言う「メディア・イベント」は、メディアの影響によって生じた社会的事件のことを指していると考えられる。宗教改革という社会的事件が成立するためにメディアが必要であると同時に、宗教改革という社会的事件もまた、メディアを変質させるという、社会的事件とメディアの相互作用によって形成されるのが、ハムにとっての「メディア・イベント」としての宗教改革である。

「馬車」のような印刷物に対する理解を深めるための契機を作ることを本稿の課題とする。ただし宗教改革に関わる全ての地理的範囲や宗派、時期を扱うことはできないので、地理的には「馬車」が出版された神聖ローマ帝国、宗派的にはカールシュタットとの関わりが深いルター派、時期的には16世紀前半の初期宗教改革の時期を中心に検討を行う。

2 宗教改革の時代

2.1 複数形の宗教改革

「馬車」の著者であるカールシュタットは、このビラを出版した1519年、ザクセン選帝侯領にあるヴィッテンベルク大学の神学部教授を務めていた⁵⁾。この大学神学部はルターの勤務していた大学でもあるので、両者は同僚ということになる。カールシュタットは、この時期ルターと共に、カトリックの神学者ヨハン・エック Johann Eck と神学論争を行い、福音主義的な神学を主張するなど、元々はルターの協力者でもあった⁶⁾。

しかし、その後カールシュタットは、ヴィッテンベルク市内における宗教改革の進め方や聖餐論をめぐるルターと対立するようになり、1523年にはヴィッテンベルク市を離れざるを得なくなり、ルターと決裂した1524年にはザクセン選帝侯領を去ることとなった⁷⁾。

では、歴史学研究においてカールシュタットは、どのように位置づけられるのであろうか？ カールシュタットは、トーマス・ミュンツァー Thomas

5) Ulrich Bubenheimer, Karlstadt, Andreas Rudolff Bodenstein von (1486-1541), in: *Theologische Realenzyklopädie*, Bd. 17, Berlin/New York 1988, S. 649.

6) 小田部によれば、エックとカールシュタットの主要な論争点は、神学的論証における権威の問題と人間の意志と神の恵みとの関係であった。小田部進一、116頁。

7) カールシュタットとルターの聖餐論の違いについては以下を参照。Ronald J. Sider, *Andreas Bodenstein von Karlstadt. The Development of his Thought 1517-1525*, Leiden, 1974, pp. 140-144, 291-299; 倉松功『ルター、ミュンツァー、カールシュタット《その生涯と神学思想の比較》』聖文舎、1973年、1981年改訂3版、149-154頁。カールシュタットの逃亡については、以下を参照。倉松功、136-141頁。

Müntzer、再洗礼派、心霊主義者、反三位一体論者などと共に、ルターによって「熱狂主義者 Schwärmer」と呼ばれた。これは、自身の啓示を引きあいに出して聖書を恣意的に解釈し、 sacrament を誤って理解し、世俗権力を転覆しようとする者たちを表す蔑称である⁸⁾。カールシュタットたちの評価は16世紀以来長らくこのような否定的なものだったが、第二次大戦後の宗教改革史研究では、彼らを「熱狂主義者」のような蔑称ではなく、「宗教改革の左翼 The Left Wing of the Reformation」あるいは「宗教改革急進派 The Radical Reformation」という呼称で呼ぼうという動きが強まった。これらの呼称は、カールシュタットをはじめとする公権力と結びつかず、徹底的に宗教改革を実行しようとした諸派の総称である⁹⁾。こうした研究の影響で1960年代以降、ルター派や改革派、イングランド国教会とは異なり公権力と結びつかずに宗教改革を行おうとした者たちも、宗教改革・プロテスタンティズムの担い手として扱われるようになっていった。ただし、これらの呼称も、ルターやカルヴァンといった世俗権力と結びついた改革者を基準としたものであり、ルター派や改革派中心の見方であるという性格は拭い切れていなかったと言える。

しかし、21世紀に入り、宗教改革の多様性を強調し、世俗権力と結びついたプロテスタント教会を特権化する伝統的な宗教改革観を相対化する見方が影響力を強めている。つまり、ルターやカルヴァンだけでなく、カールシュタットや再洗礼派などの「急進派」と呼ばれてきた諸派、さらにはかつては宗教改革の敵だと考えられてきたカトリック教会もまた、それぞれのやり方で教会の改革をしようとしており、それらの試みは全て「宗教改革」だと考えられるようになりつつある。宗教改革急進派の存在が宗教改革史研究の中で定着したこと、ルター派や改革派といったプロテスタントの多数派教会の間でも組織や神学の違いがあったと強調されるようになったこと、宗教改革以前からカトリッ

8) Hans-Jürgen Goertz, *Religiöse Bewegungen in der Frühen Neuzeit*, München 1993, S. 59f.

9) これらの概念について批判的検討については、以下を参照。Goertz, *Religiöse Bewegungen*, S. 61f.; 倉塚平「序説 ラディカル・リフォーメーション研究史」倉塚平、田中真造他編訳『宗教改革急進派 ラディカル・リフォーメーションの思想と行動』ヨルダン社、1972年、45-49頁。

ク教会が活発に教会改革を行っており、プロテスタントもそれらの改革の影響を受けていたこと、16世紀半ば以降進化した宗派化をカトリックもプロテスタントも行おうとしていたことなどが理解されるようになってきたためである。その結果、特に英語圏の研究では、「諸宗教改革 The Reformations」と複数形で宗教改革を呼び表すことが増えている¹⁰⁾。そのため、現在ではカールシュタットの目指した改革もまた、このような複数形の宗教改革のうちの一つとして位置づけられる。

ただし、カールシュタットの性格づけをするときには、時期によって神学や他の改革者との関係が変化したことを考慮することも必要である。「馬車」が出版された1519年には、カールシュタットはまだルターの同志であった。ルターと決裂した後は、各地を転々とし、1530年にフルドリヒ・ツヴィングリの支援でチューリヒで職を得た。1534年にはツヴィングリの死後チューリヒの中心的改革者としての役割を勤めたハインリヒ・ブリンガー Heinrich Bullinger の推薦でバーゼル大学の教授・聖ペテロ教会の牧師に就任している¹¹⁾。その意味では、彼は時期によってルター派とも言えるし、急進派とも言えるし、スイス改革派とも言える。改革者の思想は発展・変化するものであり、他の改革者との関係も変わっていく。そのため、宗派形成が進む前の初期宗教改革の時期では、個々の改革者の立場を固定的に理解することはできないということになる。

2.2 ヴィッテンベルク宗教改革の進展

それでは、「馬車」が出版された1519年は、宗教改革の歴史の中でどのように位置づけられるであろうか。それを考えるための前提として先ず「宗教改革」の時間的範囲を確認した後、1519年のような初期宗教改革期の特色を見て行く。

10) 永本哲也「拡散と収束－複数形、長期、グローバルな観点による宗教改革像の黎明」『歴史学研究』975、2018年10月号、19-20頁。

11) Bubenheimer, S. 653; 倉松功、142-144頁。

宗教改革はルターと密接に結びつけられて考えたために、長らく宗教改革の始まりはルターが『95箇条の提題』を公表した1517年に置かれていた。その終わりも、神聖ローマ帝国ではじめてルター派が公認されたアウクスブルクの和議、ルターやカルヴァンという代表的な改革者が死去した16世紀半ばだと考えられてきた¹²⁾。この見方では、宗教改革は半世紀程度で終わった運動ということになる。

しかし、21世紀に入ると宗教改革の時間的範囲が大幅に広げられることになる。一方では、中世と宗教改革の連続性が強調されるようになってきた¹³⁾。理由の一つは、ルターをはじめとする改革者たちの神学も、中世後期と断絶していないことが指摘されるようになったことにある。例えば、ベルント・ハムは、「聖書のみ sola scripta」のような「のみ sola」を使った表現に端的に見られる中心的規範を目指す指向は、中世後期にすでに広まっており、宗教改革に引きつがれたと指摘した¹⁴⁾。また、カトリック教会でも、既に中世後期から修道院の改革や創設などの教会改革が活発に行われ、16世紀以降も継続していた¹⁵⁾。近年ではこれも宗教改革の枠組みの中で理解されるようになっている。

他方で、1980年代に宗派化論が興隆することで、16世紀後半以降の時代に対する注目が高まった。宗派化とは、16世紀半ば以降に教会と国家が支配領域の宗派的統一性を確立するために推進した運動ないし政策のことである。この宗派化は特定の宗派に限られた動きではなく、ルター派、カトリック、改革

12) アウクスブルクの和議は1555年、ルターの死は1546年、カルヴァンの死は1564年のことである。ドイツの宗教改革の記述は、アウクスブルクの和議までを扱うものが多かった。例えば、Leopold Ranke, *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation*, 5. Band, Berlin 1852; ペーター・ブリックレ著、田中真造、増本浩子訳『ドイツの宗教改革』教文館、1991年。

13) 原田晶子「中世後期への拡大——中世と連続する大変革（広がる宗教改革1）」『UP』539、2017年9月号、12–18頁。

14) Berndt Hamm, *Von der spätmittelalterlichen reformatio zur Reformation: der Prozeß normativer Zentrierung von Religion und Gesellschaft in Deutschland*, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 84, 1993, S. 7–82.

15) 中世後期以来のカトリック改革については、以下を参照。Michael A. Mullett, *The Catholic Reformation*, London/New York, 2014; N. タナー著、野谷啓二訳『新カトリック教会小史』教文館、2013年、第3章、第4章。

派という異なる宗派に共通した動きであった¹⁶⁾。宗派化は、ヨーロッパ社会が複数の宗派に分裂したことに起因しているため、宗教改革と不可分である。その結果、宗教改革研究も、その時間的射程を宗派化の時代、つまり 16 世紀後半から 17～18 世紀にまで延長することになった。

こうして宗教改革研究で「長期の宗教改革」という見方の影響が強まり、宗教改革は、中世後期から 17～18 世紀までの長期的な運動だと理解されるようになってきた¹⁷⁾。このような見方では、1517 年の事件やルター、初期宗教改革の重要性は、以前と比べると相対化されるようになる。

また、複数形の宗教改革や宗派化論の登場によって、宗派は長い時間をかけて徐々に形成されていったものだということが明らかになってきた。それに伴い、近年の研究では、宗教改革の初期では、カトリックやルター派、改革派などの宗派はまだ確立されておらず、宗派の枠組みに留まらない多様な改革の試みが存在していたことが指摘されている。例えば、カトリック教会に留まっていたが、福音主義にシンパシーを感じていた者たちである。このような状態を、深沢克己は「教会改革と信仰刷新を求める多様な願望の星雲状態」と呼び表している¹⁸⁾。

ルターの支持者たちが形成した宗派「ルター派 Lutheraner」¹⁹⁾は、1517 年の

16) 宗派化論については以下を参照。踊共二「宗派化論——ヨーロッパ近世史のキーコンセプト——」『武蔵大学人文学会雑誌』第 42 巻第 3・4 号、2011 年、221-270 頁；踊共二「宗派化と世俗化の歴史解釈——ヨーロッパ史からグローバルヒストリーへ」『東欧史研究』40、2018 年、1-12 頁。

17) 長期の宗教改革については以下を参照。永本哲也「拡散と収束」、20-21 頁。

18) 深沢克己「カルヴァン以前のフランス宗教改革」踊共二編著『記憶と忘却のドイツ宗教改革——語りなおす歴史 1517-2017——』ミネルヴァ書房、2017 年、136 頁。

19) 1555 年のアウクスブルクの和議ではルター派ではなく、「アウクスブルク信仰告白を支持する諸身分 die Stende, so der Augspurgischen Confession verwandt」と呼ばれている。Ferdinand I., Heiliges Römisches Reich, Kaiser, *Abschiedt Der Römischen Königlichen Maiestat, vnd gemeiner Stendt, auff dem Reichstag zu Augspurg, Anno Domini M.D.L.V. auffgericht. Sampt Der Keyserlichen Maiestat Cam[m]ergerichts Ordnung, wie die auff diesem Reichstag, durch die Königliche Maiestat, vnd gemeine Stendt, widerumb ersehen, renewert, vnd an vilen orten geendert*, Meyntz 1555, fol. 6v. (https://daten.digital-sammlungen.de/bsb00001441/image_16 : 2021 年 1 月 3 日閲覧)『アウクスブルクの和議』には、永田諒一による翻訳がある。永田諒一『ドイツ近世の社会と

「95 箇条の提題」公表後、ルターとその支持者がローマ教皇とカトリック教会と決裂したことによって成立した。ただし、ルター派の形成は、漸進的なものであった。1520 年に教皇がルターに破門威嚇勅書を出し、ルターが公然とこれを焼き捨てた時点で、ルターとその支持者はカトリック教会と半ば決裂していた。また、1521 年のヴォルムス帝国議会でルターは帝国追放令を宣告され皇帝からの政治的圧力が強まったが、その後もルターはザクセン選帝侯に保護され活動を続けることができた。帝国では、ヘッセン方伯などの世俗諸侯やニュルンベルクなどの帝国諸都市がルターを支持するようになり、各地でルター主義的な教会改革が実行されていった。

1530 年にはヴィッテンベルク大学でのルターの同僚フィリップ・メランヒトン Philipp Melancthon の手によってルター派の基本的な教えが『アウクスブルク信仰告白』にまとめられ、1531 年には宗教改革を支持する諸侯と帝国都市がカトリック勢力に対抗するためにシュマルカルデン同盟を結成するなど、宗派形成が進行した。こうして 1530 年代以降、帝国でカトリックとルター派の帝国諸身分が対立を深めていったが、他方では、1540 年代まではカトリックとルター派の神学者の間で、神学的な和解を模索した話し合いも行われた。しかし結局 1546 年のシュマルカルデン戦争という宗教戦争を経て、1555 年のアウクスブルクの和議でルター派が公認されたことで、帝国でルター派の地位が確立された。ただし、その後もルター派内部では、厳格ルター派とフィリップ派の争いが続き、『和協信条』で内部対立が一段落するのはようやく 1577 年のことであった²⁰⁾。

カールシュタットの「馬車」が出された 1519 年は、まだルターやカールシュタットの神学も発展の途上にあり、カトリック教会と決裂しておらず、「ルター派」という宗派も存在していなかった。1518～19 年にかけて、カールシュ

教会——宗教改革と信仰派対立の時代——』ミネルヴァ書房、2000 年、314-329 頁。
ただし、「ルター派」という呼称も、それ以前から用いられていた。

20) ドイツにおける宗教改革の進展の経緯については以下を参照。R. シュトゥッペリ
ヒ著、森田安一訳『ドイツ宗教改革史研究』ヨルダン社、1984 年。

タットは、インゴルシュタット大学の神学者ヨハン・エックと印刷物を通じて神学論争を繰り広げていた²¹⁾。1519年の6～7月にはライプツィヒで、ルター、カールシュタット、エックが参加した討論会が開催された。このライプツィヒ討論会で、ルターが教会の頭はキリストであり教皇ではないというヤン・フスの主張を認めたが、異端として処刑されたフスの教えを認めることでルターも異端として断罪される余地を与えることとなった。これにより1520年夏にルターに対し破門威嚇勅書が出され、自説の撤回が求められたが、12月にルターはこの教皇勅書を焼き捨てこれを拒絶した。そのため、1521年1月に教皇から破門勅書が出された²²⁾。これ以降ルターとその支持者は、カトリック教会との対決姿勢を強めるようになった。

このようにライプツィヒ討論会は、ルターとカトリック教会が決裂する重要な契機となった出来事だったが、カールシュタットの「馬車」が出版されたのは、この直前のことであった。当然、「馬車」の主要な批判の対象は、この時の主要な論敵であるヨハン・エックである。つまり、「馬車」は、カールシュタットが、カトリック教会と決裂し、別の教会を作るより前に、カトリック教会の枠内で知識人同士の神学論争を行っていた時期のプロパガンダ文書だということになる。

3 活版印刷術の時代

宗教改革の時代は、キリスト教会の改革を目指した多数の改革者たちが現れ、競合し、宣教や宗派・教会形成を試みた時代であった。この時代に彼らが、自分たちの改革理念を人々に訴えかける際に、活版印刷術が重要な役割を果たしたと言われるが、他方では改革者たちの出版活動は出版市場を大きく変化させた。以下、カールシュタットの「馬車」が生まれた、印刷物と市場をめぐる環境の変化を概観する。

21) Alejandro Zorzin, *Karlstadt als Flugschriftenautor*, Göttingen 1990, S. 86–89.

22) ライプツィヒ討論会以降の経緯は以下を参照。シュトゥッペリヒ、43–51頁。

3.1 活版印刷術の確立と印刷市場の形成

ヨーロッパでの活版印刷術が確立されたのは、中世後期のことであった。15世紀半ばに神聖ローマ帝国の都市マインツでヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を確立し、印刷本の販売を始めると、西ヨーロッパ各地の大都市を中心に印刷所が次々と作られた²³⁾。

初期の印刷本は、多くの点でそれまでヨーロッパで作られ続けていた写本を引き継いだものであった。15世紀後半に作られたこれら初期の印刷本は、インキュナブラ（Incunabula）と呼ばれる²⁴⁾。この時期の印刷本は、後の印刷本に見られるような様々な特徴をまだ備えていなかった。インキュナブラは当初標題紙を持たず、著者や書名、出版社、出版年を示す独立の表紙を持たなかったし、頁付けもほとんど行われなかった²⁵⁾。多くの場合本は完成品として売られるのではなく、購入した顧客が自らの製本業者に依頼することで個別に製本された。豪華な印刷本を求める顧客のために、紙ではなく羊皮紙に印刷されたり、人の手によってイニシャルや彩色画が施されることもあった²⁶⁾。そのため、本の価格も非常に高価であった²⁷⁾。このように初期の印刷本は、まだ完全に大量生産品にはなっていなかった。

宗教改革前に印刷された本の大半は、ラテン語で印刷されていた。インキュナブラの使用言語を見ると、77%がラテン語、イタリア語が7%、ドイツ語が

23) アンドルー・ベティグリー著、桑木野幸司訳『印刷という革命 ルネサンスの本と日常生活（新装版）』白水社、2017年、45-69頁。

24) インキュナブラについては、以下を参照。1996年；折田洋晴『インキュナブラの世界』日本図書館協会、2000年；佐川美智子、高木幸枝、雪嶋宏一編『書物の森へ——西洋の初期印刷本と版画』町田市立国際版画美術館、1996年。

25) 雪嶋宏一「ヨーロッパの初期印刷本」『書物の森へ——西洋の初期印刷本と版画』20、24頁。

26) 雪嶋宏一、24頁；折田洋晴、80-82、87-88頁；アンソニー・グラフトン著、片山英男訳「人文主義者が読む」ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編、田村毅他訳『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店、2000年、252-261頁。

27) 折田洋晴、28頁。

5-6%、フランス語が4-5%であった²⁸⁾。宗教改革前夜の神聖ローマ帝国で出版された本に関しても、その75%がラテン語で書かれていた²⁹⁾。中世ヨーロッパでは、ラテン語は日常の話し言葉としては使われておらず、聖職者や知識人とといった一部の教養ある人々が利用した言語だった。そのため、初期の印刷本のほとんどは、ラテン語を理解できるような少数の人々に向けて作成されていたことが分かる。

印刷本市場で人気を博した本も、新しく書き下ろされた本ではなく、トマス・ア・ケンピス、ヤコブス・デ・ウォラギネ、ペトラルカ、ダンテ、キケロ、ウェルギリウスなど以前から広く読まれていた著者によるものが多かった³⁰⁾。

以上の点からアンドルー・ペティグリーは、宗教改革が始まるまでは、印刷業界はもっぱら裕福でごく狭い読者層を相手にした、定評ある古典などのどちらかというと保守的な作品を提供していたと結論づけている³¹⁾。

この少数の読者へと向けた書籍販売は、早々に危機に陥ることとなった。ペティグリーによれば、それは初期の印刷業者が書籍売買という新しい市場がもたらした困難さに直面したためであった³²⁾。その困難とは、本をいかに購入者に届けるかであった。写本の場合、写本を欲しいものから個別に発注を受けるので、作成した写本が売れないということを考えずに済んだ。しかし、印刷物は、先ず活字の鋳造費、紙代、行員の賃金に多額の投資を行い本を印刷した後に、その本を販売する必要があった。しかし、印刷業者は、完成した本を誰が

28) 雪嶋宏一、18 頁。

29) Andrew Pettegree, *Print Workshops and Markets*, in: Ulinka Rublack (ed.), *The Oxford Handbook of the Protestant Reformations*, Oxford, 2017, p. 382. ペティグリーは自身がプロジェクトディレクターを務める近世印刷物のオンラインカタログである Universal Short Title Catalogue (USTC: <https://www.ustc.ac.uk/>) に基づきデータを提示している。エンゲルジングもドイツの揺籃期本のうち 21% のみがドイツ語文献だったと述べている。R. エンゲルジング著、中川勇治訳『文盲と読書の社会史』思索社、1985 年、38 頁。

30) ペティグリー、103-109 頁。

31) ペティグリー、111 頁。

32) ペティグリー、96-99、110-111 頁。

買ってくれるのか、本を個々の購買者にいかに届ければ良いのかを分かっていなかった。そのため、しばしば印刷業者は、本の販売によって投資した資金を回収できない、あるいは回収するまで長い間在庫を抱え込む危険があった。また、『ニュルンベルク年代記』のように多額の資金を投資して多数の販売に成功しても、他の業者が海賊版を出して市場を食い荒らすことがあった³³⁾。

活版印刷術が確立された後、ヨーロッパ中に多数の印刷業者が作られた。しかし、小規模な印刷業者の多くは、15世紀末には経営破綻することになり、パリやリヨン、ヴェネツィアやローマ、バーゼルやアウクスブルク、ニュルンベルクなど12の拠点都市で本の全生産量の3分の2を印刷するなど、大規模な印刷工房にヨーロッパの印刷業が集約されることとなった³⁴⁾。

16世紀にもこの12都市のうち9都市が依然として本の中心的拠点であり続けたが、その後低地地方のアントウェルペンとイングランドのロンドンが台頭した。両都市は他の印刷業の中心都市と同様にヨーロッパを代表する大都市であったが、小都市であるにもかかわらず新たに印刷業の中心地の一つに成長したのがドイツのヴィッテンベルクであった³⁵⁾。

3.2 宗教改革と印刷市場の激変

ヴィッテンベルクでも1502から16年にかけて、5つの印刷業者が営業したが、他の小都市と同様に短命に終わった。唯一エアフルトから誘致されたヨハン・ラウ・グルネンベルク Johann Rhau-Grunenberg が、大学関係の学者の著作を請け負うことで経営を軌道に乗せることができた³⁶⁾。このヴィッテンベルクの印刷業をヨーロッパ有数の出版業の中心地へと押し上げ、神聖ローマ帝国の印刷業そのものを大きく変える契機となったのは、ルターが1517年に公表した『95箇条の提題』であった。

33) ペティグリー、75-79、96-99 頁。

34) ペティグリー、98-99、155 頁；Pettegree, *Print Workshops and Markets*, pp. 376f.

35) ペティグリー、155 頁。

36) ペティグリー、155-157 頁。

カトリック教会の贖宥を批判したルターのこの著作は、すぐにニュルンベルクとバーゼルで出版された。翌年 1518 年に俗人の平信徒向けにドイツ語で書かれた『贖宥と恩恵とについての説教』が出版されると、この著作は次々と版を重ねた。ラウ・グルネンベルクによって第三版までが出版された後には、ライプツィヒ、ニュルンベルク、アウクスブルク、バーゼルで再版された。ルターはこの後も次々と新たな著作を出版した。エンゲルジnkによれば、彼の著作は 1500 年から 40 年までの間に出版されたドイツの書籍全体の 3 分の 1 を占めたという³⁷⁾。ルターの出したパンフレットは一つの版について 2 万部近くが売れるなど、どれも驚異的な売れ行きを示した。ルターが 1529 年に出版した『小教理問答』、ルターが翻訳し 1522 年に出版されたドイツ語訳の『新約聖書』、1534 年に出版されたドイツ語訳の『旧約新約聖書』の売り上げは、それぞれ 10 万部に達したという³⁸⁾。

ルターの著作が市場に登場したことは、ドイツの出版市場を劇的に成長させた。ルターだけでなく、他の宗教改革関連の本も多数出版・販売されたためである³⁹⁾。1520 年から 25 年にかけてドイツの出版業界は 7764 点を刊行したが、これはその前の 10 年と比べると 340% の増加であった。宗教改革が始まった後の最初の 10 年で、福音主義関連のパンフレットが 600~700 万部市場に回った⁴⁰⁾。このようにドイツでは 1517 年以降爆発的に印刷物の出版点数が増加した⁴¹⁾。

ルターたち帝国の福音派が、当初から活版印刷を自分たちのプロパガンダの

37) ベティグリー、161-162 頁、エンゲルジnk、60 頁；Rolf Engelsing, *Analfabetismus und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft*, Stuttgart 1973, S. 28.

38) エンゲルジnk、61 頁；Engelsing, S. 29.

39) Andrew Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, Cambridge/New York, 2005, pp. 166f.

40) ベティグリー、170 頁。

41) 以下も参照。Hans-Joachim Köhler, *Erste Schritte zu einem Meinungsprofil der frühen Reformationszeit*, in: Volker Press und Dieter Stievermann (Hg.), *Martin Luther. Probleme seiner Zeit*, Stuttgart 1986, S. 266; 永田諒一『宗教改革の真実 カトリックとプロテスタントの社会史』講談社現代新書、2004 年、35-38 頁。

ために有効に利用したのに対し、カトリック側は新しい論争環境に上手く対応できなかった。エルザス地方出身の神学者トーマス・ムルナー Thomas Murner のようにルターを批判する風刺詩を出版するなど、印刷物を使って福音派に対抗した者がいなかったわけではないが、カトリックの作家の本は福音派ほどは売れなかった⁴²⁾。ライプツィヒでは当初はルターの著作から多くの利益を上げていたが、1522年にザクセン公ゲオルクが自領内でのルターの著作の印刷・販売を禁じると、市内の書籍生産が一気に落ち込んでしまった⁴³⁾。このようにカトリックの著作に対する需要は福音派と比べて著しく小さかったため、福音派の著作の出版物の量は、カトリック側よりも圧倒的に多かった⁴⁴⁾。こうして福音派はドイツの印刷市場を席卷した。

ルターの著作に端を発する宗教改革の衝撃は、ヴィッテンベルクのみならず、ドイツの出版業、さらには本のかたちやそれを取り巻く環境を大きく変化させた。

ルターの著作に対する巨大な需要は、ヴィッテンベルクの印刷業者に多くの利益をもたらした。宗教改革前に多くの印刷業者を廃業に追いやった買い手の不足という経営上のリスクは、ルターの著作という確実に売れる本を出版できるヴィッテンベルクの印刷業者には無縁のものとなった。最初はラウ・グルネンベルクだけだったヴィッテンベルクの印刷業者も増加し、1520年から25年の間に600点の書籍を刊行した。ルターの著作は他の都市でも再販され、ルター以外の宗教改革関連のパンフレットもよく売れたため、アウクスブルク、ニュ

42) Pettegree, *Print Workshops and Markets*, p. 382. ムルナーについては、森田安一『ルターの首引き猫 木版画で読む宗教改革』山川出版社、1993年、212-256頁を参照。ムルナーのパンフレットの原著と日本語訳。Thomas Murner, *Von dem grossen Lutherischen Narren wie in doctor Murner beschworen hat, etc.*, 1522. (https://books.google.co.jp/books?id=WlJnAAAAcAAJ&dq=Von+den+grossen+lutherischen+Narren&hl=ja&source=gbs_navlinks_s; 2020年1月3日閲覧); 名古屋初期新高ドイツ語研究会訳「トーマス・ムルナー『ルター派の大阿呆』(1)~(5)」『中京大学教養論叢』45-48、『国際教養学部論叢』1、2004-2009年。

43) ベティグリー、176頁。

44) ベティグリー、339頁。

ルンベルク、バーゼル、シュトラースブルクといったドイツ語圏の他の拠点都市の印刷業者もその恩恵に与ることができた。さらに、少なくとも 34 ヶ所で、新たに印刷所が作られたり、一度休止した出版事業が再開された⁴⁵⁾。こうして、帝国全体の印刷業が宗教改革によって活性化した。

しかし、宗教改革は、印刷市場だけでなく、市場で流通する印刷物のあり方そのものを大きく変えていった。第一に、宗教改革によってドイツで刊行された出版物の中心が、大型本からパンフレットやビラという小型の印刷物へと変わった。技術的進歩もあり印刷本は次第に小型化が進んだものの、初期の印刷本は高価な大型本が中心だった。パンフレットや一枚刷りのビラも刷られていたが、インキュナブラの 25% を占めるだけであった⁴⁶⁾。しかし、宗教改革以降、これらパンフレットやビラの出版点数が劇的に増加した。ケーラーの示す統計によると、1517 年以降書籍もパンフレットも同じく出版点数を急速に伸ばした。1517 年の時点ではパンフレットの出版点数は本と比べて非常に少なかったが、1520 年にはパンフレットは本を上回り、1524 年には倍近くまで増加した。その後 1525 年の農民戦争終結の影響でパンフレットの出版点数は急激に減少し、1526 年から 27 年頃には本を下回るようになったため、パンフレットが優位にあった時期は短かったが、1520 から 25 年には、ドイツの出版市場でパンフレットが支配的な地位にあったことになる⁴⁷⁾。パンフレットやビラは、ページ数が少なく、安価であった。ペティグリーは、最も安いパンフレットは、手工業者の数時間分の給金で買えたと見積もっている⁴⁸⁾。パンフレットの購入者と本の購入者は重なっていたため、必ずしもパンフレットが民衆向けのメディアだと言うことはできないが、印刷が容易で、安価で、出版点数が多かったパンフレットが、本が中心だったそれ以前のと比べると大幅に多くの人々によって購入されたことは確かである。

45) ペティグリー、163-179 頁。

46) 折田洋晴、25、72-73 頁。

47) Köhler, S. 250ff., 267.

48) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 159.

第二に、宗教改革によって、出版される印刷物で用いられる言語も大きく変化した。宗教改革前の本は、その大半がラテン語で書かれていた。ケーラーが示す言語別のパンフレット出版点数の推移を見ても、1517年以降急速に増加したパンフレットの大半はラテン語で書かれたものであった。しかし、新高ドイツ語パンフレットの出版点数は急速に上昇し、1519年から20年の間にラテン語パンフレットを越えた。ラテン語パンフレットの出版点数は1520年を頂点に減少に転じたのに対し、ドイツ語パンフレットは増加し続け、パンフレット市場で支配的な地位を占めるようになった⁴⁹⁾。このことは、パンフレットの対象読者が、ラテン語が読める聖職者や知識人から、より広い階層に属する人々に変ったことを示している。

第三に、パンフレットは、知識人層だけでなく、俗人によっても執筆されるようになったことである。宗教改革のパンフレットの著者は、元々大学の神学教授であったルターやカールシュタット、メランヒトンを始めとする大学で学んだ神学者、聖職者、人文主義者といった知識人層であった。しかし、次第に貴族、手工業者、芸術家、それ以外の市民など大学で学んだことがない俗人も、宗教改革のメッセージを伝えるためにパンフレットを執筆するようになった。ベルント・ハムは彼らの代表として、バイエルンの貴族女性アルギュラ・フォン・グルムバッハ Argula von Grumbach とニュルンベルクの靴職人で劇作家として名を馳せたハンス・ザックス Hans Sachs、農民戦争で起草された『十二箇条』の著者または共著者を挙げている⁵⁰⁾。

49) Köhler, S. 251, 267.

50) Hamm, Die Reformation als Medienereignis, S. 143f. グルムバッハについては、伊勢田奈緒『女性宗教改革者アルギュラ・フォン・グルムバッハの異議申立て』日本評論社、2016年；Kirsi Stjerna, *Women and the Reformation*, Malden/Oxford, 2009, pp. 71–85、ハンス・ザックスについては、永野藤夫『宗教改革時代のドイツ演劇——その史的発展の考察——』創文社、1962年、709–900頁；塚本由美「謝肉祭劇に描かれた宗教改革——ハンス・ザックスの作品に基づいて——」『文学研究論集（文学・史学・地理学）』4、1996年、141–150頁；Berndt Hamm, *Bürgertum und Glaube. Konturen der städtischen Reformation*, Göttingen 1996, S. 181–231 を参照。『12箇条』は、メミンゲン市の毛皮職人ゼバスチアン・ロットァー Sebastian Lotzer がメミンゲン市の説教師クリストフ・シャペラー Christoph Schappeler の支援を得て

3.3 カールシュタットの「馬車」と印刷市場

カールシュタットの「馬車」は、ルターがベストセラー作家として人気を上昇させ、ヴィッテンベルクがヨーロッパの出版の中心地へと成長し始めようとしていた1519年に出版された。当時はヴィッテンベルクの印刷業者は、まだラウ・グルネンベルクだけだったため、「馬車」もまたルターの著作同様ここから出版された。1519年は、1517年以降パンフレットの出版点数が急激に増えた後、1520年に書籍と逆転する直前の年であった。「馬車」は急激な勢いで出版されていった小型出版物の一つだったのである。

1520年はそれまで優位にあったラテン語パンフレットが、ドイツ語パンフレットに逆転された年でもある。つまり、「馬車」が出た1519年は急速にドイツ語パンフレットの出版点数が増えつつも、まだラテン語に及んでいなかった時期に当たる。「馬車」もまたラテン語とドイツ語出版物の過渡的性格を持っていた。「馬車」が1519年3月に出版されたときはラテン語で本文が書かれていた。しかし、その後同年4月までに、ドイツ語でも出版された⁵¹⁾。さらに、「馬車」の内容をより詳しく説明するために、同年5月にライブツィヒのメルヒオール・ロッター Melchor Lotter の印刷工房から、『解説』を刊行した⁵²⁾。

編纂したものだと目されている。ペーター・ブリックレ著、前間良爾、田中真造訳『1525年の革命 ドイツ農民戦争の社会構造的的研究』刀水書房、1988年、34頁；野々瀬浩司『ドイツ農民戦争と宗教改革 近世スイス史の一断面』慶應義塾大学出版、2000年、40-47頁。『12箇条』本文とその日本語訳。Dye Grndtlichen Vnd rechten haupt Artikel aller Baurshaft vnnd Hyndersessen der Gaistlichen vn[d] Weltlichen oberkeyten, von wölichen sy sich beschwert vermainen, Augsburg 1525 (<http://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb10861272-9> ; 2020年1月3日閲覧)；前間良爾訳「シュヴァーベン農民の12箇条(1525年)」田中真造、松山興志雄、倉松功、宮庄哲夫、前間良爾訳『宗教改革著作集7 ミュンツァー、カールシュタット、農民戦争』教文館、1985年、341-351頁。

51) Roper and Spinks, p. 19; Zorzin, S. 89.

52) Andreas Karlstadt, *Auszlegung vnnd Lenntung etzlicher heyligenn geschrifften So dem menschen dienstlich vnd erschießlich seint zu Christlichem lebē. kurtzlich berurth vnd angetzeichēt in den figurn vnd schrifften der wagen*, Leipzig 1519. この著作は、ハレ・ヴィッテンベルク大学・ザクセン-アンハルト州立図書館でオンライン公開されている。(<http://digitale.bibliothek.uni-halle.de/urn/urn:nbn:de:gbv:3:1-195918> ; 2020年1月3日閲覧)

この時期は、カールシュタットの著作の執筆言語が変わっていく過渡期でもあった。カールシュタットは1518年にはラテン語著作しか出版していないが、1519年にはじめてドイツ語著作を執筆している。ただし1519年はまだラテン語著作の方が多い。しかし、翌年1520年にはドイツ語著作の方が上回り、1522年から25年まではドイツ語著作しか出版していない⁵³⁾。つまり、「馬車」は、帝国全体の出版状況と呼応するかのように、ラテン語からドイツ語へと使用言語を転換させようとした境目の時期に書かれたことになる。

「馬車」の過渡的性格は、その内容と対象とする読者にも表れている。「馬車」は、ライプツィヒ討論会の直前に出版されたが、その時期はカールシュタットが、カトリック神学者のヨハン・エックと論争を繰り広げていた時期に当たる。カールシュタットは1518年春から1520年にかけてくり返しエックに反論する論争的な著書を出版していたが、「馬車」もそのうちの一つである⁵⁴⁾。つまり、「馬車」は、基本的には知識人の間で行われていた神学論争の一部を構成する出版物であり、想定される読者もまた彼らであった。ツォルツィンは初期のカールシュタットの著作が想定していた読者は、第一に聖職者や神学者、法曹、医者などの学識ある俗人だったと見なしている⁵⁵⁾。ただし、「馬車」は、図像を用いて、ドイツ語で出版し直されていることから分かるように、知識人以外のより広範な読者にも向けられた著作でもある。ツォルツィンは、ここでの学識者以外の読者は、民衆ではなく、宮廷の官吏などの俗人であり、神学を学ぶ若い学生であったと指摘している⁵⁶⁾。また、小田部によれば、カール

覧)

53) Zorzin, S. 35-37.

54) Zorzin, S. 85-89. ツォルツィンは、1518年から25年にかけてのカールシュタットの著作を、1518年5月～1520年2・3月の第一期、1520年8月～1521年1月の第二期、1521年6・7月～1522年4月までの第三期、1523年初め～1523年4月の第四期、1523年12月～1524年5月の第五期、1524年10月～1525年9月までの第六期に分けている。「馬車」は第一期の著作で、カールシュタットが最初期に出版したということになる。Zorzin, S. 85-109.

55) Zorzin, S. 141.

56) Zorzin, S. 139-141. カールシュタットがドイツ語で出版した最初のパフレット『馬車』の『解説』がザクセン選帝侯フリードリヒの顧問官デーゲンハルト・ブ

シュタットは、「馬車」の中でスコラ神学者と世俗の一信徒を対置し、後者のような学識がない単純素朴な俗人の方が、学識ある神学者よりもより高い理解を備えていると評価しており、世俗の信徒に対する牧会的・教育的関心が見られるという⁵⁷⁾。その意味でも、「馬車」は、聖職者や知識人との問題が、次第に社会のより広い階層にとっての問題へと変わりつつある、過渡的な時期の出版物だと言える。

ただし、知識人以外の読者をどの程度意識して著作を書いたかは、ヴィッテンベルクの宗教改革者によって異なる。ツォルツインによれば、1526年までの出版物を見ると、フィリップ・メランヒトンの著作はラテン語やギリシア語がほとんどであったが、ルターやカールシュタットの著作は、1520年代に入るとドイツ語の方が多くなり、特にカールシュタットは1522年以降は一切ラテン語著作を出版しなくなった⁵⁸⁾。ここからカールシュタットは、改革者の中でも最も民衆を意識して著作を執筆していたことが分かる。その意味でも、「馬車」は、カールシュタットの著作の特徴をはっきり表す著作だと言える。

4 多様なコミュニケーション手段

4.1 四つのコミュニケーション手段と印刷物との相互作用

ルターや福音主義者たちの思想が、急速に帝国の広い範囲で多くの人々に受容された重要な要因として、印刷物、特にパンフレットとビラが果たした役割が大きかったことは、宗教改革研究者の多くに受け入れられている。しかし、これらの大量の印刷物が宗教改革思想の伝播に大きな役割を果たしたことは間違いないにせよ、その効果は、ほとんどの人々が文字を読めなかった当時の社会では自ずから限界があった。この時代の帝国における識字率ははっきりとは分らないが、エンゲルジンクの推定によれば16世紀のドイツの全人口に対

フェッフィンガー Degenhart Pfeffinger に献呈されている。

57) 小田部進一、121、127 頁。

58) Zorzin, S. 26-37.

する読書能力は5%を越えていた。おそらく都市部の男性識字率はそれよりも大幅に高かったとはいえ、文字を読める者はかなりの少数であり、大半の人々は自分で印刷された宗教改革関連の印刷物を理解することができなかったことは間違いない⁵⁹⁾。

しかし、宗教改革は、知識人だけでなく民衆も参加した巨大な宗教運動であった。そのため、文字を読める者がごく少数だった16世紀の帝国で、いかに宗教改革の理念が民衆にまで広がったのかという問いが生じることになる。そこで注目されるようになったのが、印刷物が他のコミュニケーション手段と相互作用することによって、文字を読めない民衆にも宗教改革のメッセージを届けたことである。

このことを指摘した代表的な論者が、ロバート・W・スクリプナーである。彼は、文字として印刷された宗教改革のメッセージは、以下の三つのコミュニケーション手段と結びつくことで、非識字層にまで伝えられたと主張した。その三つとは、説教、本の読み上げ、うわさ、議論、歌などを通じた「口頭でのコミュニケーション」、木版画挿絵などを通じた「視覚的なコミュニケーション」、行進、蜂起、謝肉祭、焚書、歌などを通じた「コミュニケーションとしての行為」である⁶⁰⁾。

59) 16世紀ドイツの識字率については以下を参照。エンゲルジング、67-85頁。エンゲルジングやペティグリーは、ヨーロッパ各地の識字率の推定を紹介している。1600年頃のハンブルクでは書物や楽譜を購入する者が都市人口の約一割、1580～90年頃のモンペリエでは市内の手工業職人の63%が読み書きの知識を持ち、1575～93年のベジェ・ナルボンヌでは未熟練労働者の3%、小農民の10%、手工業職人の34%が読み書きできた。(エンゲルジング、68、71頁) 16世紀末までにヴェネツィアの男性識字率は33～34%、1530年のイングランドのヨーク教区では、男性識字率は20～25%と推定されるという。(ペティグリー、318-319頁)

60) Robert W. Scribner, Flugblatt und Alphabetentum. Wie kam der gemeine Mann zu reformatorischen Ideen?, in: Hans-Joachim Köhler (Hg.), *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit. Beiträge zum Tübinger Symposium 1980*, Stuttgart 1981, S. 66-74. 日本でも蝶野立彦が、スクリプナーの三分類の詳細な紹介をしている。蝶野立彦「宗教改革期のドイツにおける読書・コミュニケーション・公共性——《宗教改革的公共性》をめぐる——」松塚俊三・八鍬友広編『識字と読書——リテラシーの比較社会史』昭和堂、2010年、25-30頁。

このようにスクリプナーは、宗教改革思想は、様々なコミュニケーションが相互作用しながら伝えられたが故に、文字を読めない民衆にまで届き、その結果「公論 öffentliche Meinung」が作られたと考えた。そしてこのような人間のコミュニケーションの複雑さにより良く適合するモデルとして、「総譜 Partitur」のメタファーを使っている。つまり、様々な楽器のメロディー（コミュニケーション手段）がその時々を作るハーモニー（相互作用）を通時的に聞けば全体として一つの曲（宗教改革のメッセージ）として把握することができる⁶¹⁾。スクリプナーは、パンフレットは単独の史料としては正しく理解できないと明言しているが⁶²⁾、だとするならば、やはりカールシュタットの「馬車」も、このような「総譜」の一部として理解される必要があるということになる。

印刷物と他のコミュニケーション手段が相互作用して宗教改革思想の伝えたという考え方は、現在ではメディア史、宗教改革史研究者の間では広く受け入れられている⁶³⁾。そのため、カールシュタットの「馬車」のような印刷されたビラが当時の社会で果たした役割や影響力を検証しようとするならば、他のコミュニケーション手段とどのように相互作用していたかを考慮に入れる必要がある。そのため以下、スクリプナーをはじめとする先行研究に則りながら、印

61) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, S. 65–76.

62) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, S. 75.

63) 管見の限りスクリプナー以降、宗教改革期のメディアやコミュニケーションを扱う研究では、その大半で印刷物と他の多様なメディアの相互作用が重要だと評価されている。例えば、ヴォールファイル、ハム、ブルクハルト、ペティグリーなどである。Rainer Wohlfeil, Reformatorische Öffentlichkeit, in: Karl Stackmann (Hg.), *Literatur und Laienbildung im Spätmittelalter und in der Reformationszeit*, Stuttgart 1984, S. 43, 48; Hamm, Die Reformation als Medienereignis, S. 154–157; Johannes Burkhardt, *Das Reformationsjahrhundert. Deutsche Geschichte zwischen Medienrevolution und Institutionenbildung 1517–1617*, Stuttgart 2002, S. 58f.; Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*. ただし、説教などの口頭のコミュニケーションの効果がより大きかったと考えるスクリプナーやヴォールファイルに対し、メラーは印刷物の役割をより重視している。(Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, p. 66; Wohlfeil, S. 42; Bernd Moeller, Stadt und Buch. Bemerkungen zur Struktur der reformatorischen Bewegung in Deutschland, in: Wolfgang J. Mommsen (Hg.), *Stadtbürgertum und Adel in der Reformation. Studien zur Sozialgeschichte der Reformation in England und Deutschland*, Stuttgart 1979, S. 25–39.)

刷物とその他のコミュニケーション手段の相互作用について概観する。

ただし、ここではスクリプナーが挙げた三つのコミュニケーション手段に、「文字によるコミュニケーション」を加える。スクリプナーが上記の三つのコミュニケーション手段と宗教改革に関する印刷本の関係を検討したのは、「パンフレットと非識字層：平民はいかに宗教改革理念に至ったか？」という論文タイトルが示すように、文字を読めない者はいかに印刷本のメッセージが伝わったかを明らかにするためであった⁶⁴⁾。そのため、この論文の分析対象に識字層は含まれておらず、文字によるメッセージ伝達は検討から除外されていた。しかし、カールシュタットの「馬車」は、民衆というより識字層である知識人や学生を主な読者として想定して出版されているため、本稿では文字を通じたコミュニケーションと印刷物の関係も考慮する。

また、宗教改革期の文字によるコミュニケーションは、書籍、パンフレット、ビラなどの印刷物だけでなく、手紙などの手書きの文書によっても行われていた。ファウルスティッヒは、宗教改革期で重要な役割を果たしたメディアとして、説教やビラ、パンフレット、歌、劇と並び手紙を挙げているため⁶⁵⁾、それに倣い手紙と印刷メディアの関係も視野に入れる。

実際に個々のコミュニケーション手段とその相互作用を見る前に、これら多様なメディアの分類・整理を行っておく。メディア学やメディア史では、第1次メディア、第2次メディア、第3次メディア、第4次メディアという分類法が用いられている⁶⁶⁾。この分類は、技術と伝達の仕方を基準として行われるも

64) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum.

65) Werner Faulstich, *Medien zwischen Herrschaft und Revolte. Die Medienkultur der frühen Neuzeit (1400-1700)*, Göttingen 1998 S. 150-152.

66) ヨッヘン・ヘーリッシュはハリー・ブロス、アンドレアス・ヴェルクラーはファウルスティッヒに依拠しながらこの分類法を紹介している。ヨッヘン・ヘーリッシュ著、川島建太郎他訳『メディアの歴史 ビッグバンからインターネットまで』法政大学出版局、2017年、73-75頁；Andreas Würzler, *Medien in der frühen Neuzeit*, München 2009. S. 4. メディアの技術的側面を基準としたこの三区分法に対し、J. フィスクによる「直接表現メディア」「代行表現メディア」「機械表現メディア」という分類法は、メディアの伝達に注目したもののだが（渡辺武達「メディア学とは何か」、山口功二、渡辺武達、岡満男編『メディア学の現在〔新訂〕』世界思想社、2007年、

のである。

第1次メディアは、情報・メッセージを媒介するために技術を必要としないメディアである。つまり、声、表情、身ぶりなど人間自身がメディアとなり情報・メッセージを媒介するため、第1次メディアは「人間メディア Menschenmedia」「直接表現メディア presentational media」とも呼ばれる⁶⁷⁾。

第2次メディアは、作成には技術が必要だが、メッセージを受けるために高度な技術が必要ないメディアである。具体的には、書籍、絵画、写真、狼煙、拡声器、補聴器などが挙げられる⁶⁸⁾。例えば、本を作るためには筆記用具や紙、活字、印刷機などの技術が必要だが、印刷された本を読むためには特別な機械は必要がない。これらは、発信者から離れながらメディア自体がコミュニケーション活動を行うため、代行メディア (representational media) とも呼ばれる⁶⁹⁾。

第3次メディアまたは「機械表現メディア mechanical media」は、コミュニケーションを成功させるためには送信側と受信側双方で機械・技術を動員する必要があるメディアである。具体的には、電話、レコード、カセットテープ、ラジオ、テレビ、映画などが挙げられる⁷⁰⁾。例えば、電話で話すためには、かける側も受ける側も双方が電話機という機械を利用する必要がある。

第4次メディアは、伝統的な送り手と受け手の関係が解消された双方向的なオンラインメディアのことを示す⁷¹⁾。

しかし、宗教改革期にはまだ第3次と第4次メディアは生まれていないため、近世のメディアの分類としては、第1次メディアと第2次メディアの区別だけで十分である⁷²⁾。

3頁)、基本的な区分の仕方は共通している。そのため、近世史を含めたメディア史、メディア学一般で広く受け入れられている分類法だと言える。

67) ヘーリッシュ、73-74頁；Würgler, S. 4; 渡辺武達、3頁。

68) ヘーリッシュ、74頁；Würgler, S. 4.

69) 渡辺武達、3頁。

70) ヘーリッシュ、74頁；Würgler, S. 4; 渡辺武達、3頁。

71) Würgler, S. 4.

72) Würgler, S. 4.

上で挙げた宗教改革期のメディアで第1次メディアに当たるのは、口頭のコミュニケーションと行動としてのコミュニケーション、第2次メディアにあたるものは視覚的なコミュニケーション、文字によるコミュニケーションになる。

これらの前提を踏まえて、以下宗教改革時代の四つのコミュニケーション手段（メディア）とその相互作用について概観する。

4.2 口頭のコミュニケーション

まだマスメディアが十分に発達していなかった16世紀のヨーロッパでは、情報やメッセージは大半の場合、実際に人々が同じ場所に居合わせ顔を合わせることで伝えられた⁷³⁾。その際、身ぶり手ぶりなどと並んで、口頭での言葉を用いたコミュニケーションが行われていた。当時の人々の主要なコミュニケーション手段であった口頭のコミュニケーションは、当然のことながら宗教改革思想の伝播でも中心的な役割を果たしていたと考えられる。

4.2.1 説教

多くの研究者が、宗教改革思想の伝播において中心的役割を果たしたと考えるのが説教である⁷⁴⁾。多くの場合、宗教改革思想は、その都市で説教師職に就いている、あるいは周辺からやって来た説教師が福音主義的な説教を行うことによって人々に広まった⁷⁵⁾。まだカトリックに留まっている都市や農村、領邦

73) シュレークルはこのような「その場にいる人の間のコミュニケーション Kommunikation unter Anwesenden」がメディア革命によって次第に変質するのが近世という時代だと考えている。Rudolf Schlögl, Kommunikation und Vergesellschaftung unter Anwesenden. Formen des Sozialen und ihre Transformation in der Frühen Neuzeit, in: *Geschichte und Gesellschaft* 34, 2008, S. 155–224.

74) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, p. 66; Wohlfeil, S. 42; Burkhardt, S. 58; Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 10; Hamm, Die Reformation als Medienereignis, S. 149.

75) 南西ドイツ諸都市での説教師と宗教改革の関係については以下を参照。Manfred Hannemann, *The Diffusion of the Reformation in southwestern Germany, 1518–1534*, Chicago, 1975, pp. 84–208.

では、福音主義説教は当局によって禁じられているため、教会ではなく、野外や個人の家で説教が行われることも多かった。また、聖職者だけではなく、女性を含む俗人も説教を行うことがあった⁷⁶⁾。

都市や農村で宗教改革の理念が説教によって伝えられ、人々の間で広まると、民衆の間から共同体で宗教改革を実行するよう、当局に対し政治的な圧力がかけられた。これが当局によって受け入れられた場合、正式に福音派の説教師が任命され、職務として福音主義に基づく説教を行った⁷⁷⁾。

宗教改革が導入される前の時期だけでなく、福音主義が世俗権力によって公認され、教会の制度化が進められる段階でも説教は重要な役割を果たした。ルター派教会では、典礼における説教の役割が、カトリック教会よりも大きくなった。中世後期のカトリック教会では、特に農村の平信徒が説教を聞く機会、四旬節などの特別な機会に限られていた⁷⁸⁾。しかし、ルター派の教会では、礼拝における説教の重要性が認められ、説教は牧師の中心的な職務だと見なされるようになった。そのため毎週日曜の礼拝式をはじめとして説教が行われる頻度が上がり、平信徒は日常的に説教を聞くようになった⁷⁹⁾。ルター、ツヴィングリ、カルヴァンという各地の中心的な改革者は、いずれも卓越した説教師でもあり。日々多数の説教を行っていた⁸⁰⁾。この時代の福音派の説教は聖書講

76) R. W. Scribner, *Oral Culture and the Diffusion of Reformation Ideas*, in: idem., *Popular Culture and Popular Movements in Reformation Germany*, London/Roncheverte, 1987, p. 52.

77) このパターンは多くの都市の宗教改革運動に共通している。ミュンスターの例については以下を参照。永本哲也『ミュンスター宗教改革 1525-34年反教権主義的騒擾、宗教改革・再洗礼派運動の全体像』東北大学出版会、2018年。

78) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 12-16.

79) 帝国におけるルター派の説教については以下を参照。Beth Kreitzer, *The Lutheran Sermon*, in: Larissa Taylor (ed.), *Preachers and People in the Reformations and Early Modern Period*, Boston/Leiden, 2003, pp. 35-63; Susan C. Krant-Nunn, *Preaching the Word in Early Modern Germany*, in: Taylor, pp. 193-219.

80) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 17-25. 主要な改革者の説教は以下に翻訳されている。出村彰編『シリーズ世界の説教 宗教改革時代の説教』教文館、2013年。

解を基本としており、信徒に対する教理教育としての役割を果たした⁸¹⁾。

口頭で行われる説教は、原則としてその場限りのものであった。改革者が説教を行う際に基本的には説教原稿を作っていなかったし、説教が終わった後に説教を文字として残すことも少なかった。しかし、実際に行われた説教そのものが文字として残ることはほとんどなくとも、説教をした者本人が説教を文字化したり、説教を聞いていた聴衆がメモを取り、活字化することで、説教が出版されることもあった⁸²⁾。ルターが帝国で有名になるきっかけを作った1528年の『贖宥と恩恵についての説教』のように、説教は宗教改革期の印刷物の主要なジャンルの一つであった。マーク・エドワーズによれば、1525年までのルターの著作の5分の2、1530年までの著作の3分の1を説教が占めていた⁸³⁾。中世後期からこうした説教集は出版されており、説教師が模範とすることがあったが、ルターやハインリヒ・布林ガーのような著名な神学者の説教集も例外ではなかった⁸⁴⁾。メラーは、1520年代に出版された説教集の内容を検討し、20年代前半までの説教の神学的な教えには統一性があり、ルターと一致していたと指摘した⁸⁵⁾。つまり、他の説教師たちも、ルターから影響を受けて、説教を行っていたことになる。その際ルターの神学的著作だけでなく、説教そのものが彼らの説教の模範となったことは想像に難くない。さらに、場合によっては、説教師が説教集を見ながら実際に説教を行った可能性もある⁸⁶⁾。

81) 出村彰編『シリーズ世界の説教』26-27頁；Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 39.

82) 出村彰編『シリーズ世界の説教』18-19頁。

83) Mark U. Edwards, Jr., *Printing, Propaganda, and Martin Luther*, Berkeley, 1994, Chapter One.

84) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 15. ペティグリーは代表例として、ルター（例えば Martin Luther, *Kirchenpostille* 1522, in: *D. Martin Luthers Werke, Kritische Gesamtausgabe*, 10. Band, Erste Abteilung, Erste Hälfte, Weimar 1910）、布林ガー（Heinrich Bullinger, *Haupßbuch darinn begriffen werdend fünfzig Predigen Heynrychen Bullingers, Diener des Kirchen zu Zürich*, Bern 1558）の説教集を挙げている。

85) Bernd Moeller, Was wurde in der Frühzeit der Reformation in den deutschen Städten gepredigt?, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 75, 1984, S. 176-193.

86) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, S. 66, A. 6. スクリプナーはパンフレット

ただし、全ての説教師が、他の神学者が書いた説教集や著作を読み、その内容をそのまま説教したわけではなかった。特に初期の段階では、未だルター派や改革派といった宗派も形成されておらず、説教師たちは、自らも聖書を読み、神学的問題について考えていたためである。もちろん神学的な問題を自分で考えていたのは、聖職者だけではなく、俗人も同じだった。こうした自ら正しいキリスト教の教えや生活について思いをめぐらせていた人々は、聖職者であっても、俗人であっても、自らの考えを説教として人々に伝えようとした⁸⁷⁾。このように、初期宗教改革の時代には、俗人を含む数多くの説教師たちの説教によって、様々な宗教改革思想が広められた。

4.2.2 歌

宗教改革思想を、民衆に広めるために重要な役割を果たしたメディアとしては歌も挙げられる。宗教改革期には、ルターをはじめとする改革者たちが、俗語の賛美歌を多数作曲・出版した。ルターたちが俗語の賛美歌を作るようになったのは、彼らが従来のカトリックのミサとは異なる礼拝式を実行しようとしたためである。カトリックのミサはラテン語という民衆には理解できない言葉で行われていたのに対し、ルターは礼拝式を誰にでも分かる俗語、つまりドイツ語で行おうと考えた。そのため彼は、1523年に『会衆の礼拝式について』や『ミサと聖餐の原則』、1526年に『ドイツミサと礼拝の順序』などの著作を

とビラの挿絵で、説教師が本を持って説教していることを指摘している。ただし、挿絵で描かれたことが実際の説教で行われたことを反映しているとは限らないため、論拠として適切かどうかは不明である。

- 87) 俗人でありながら神学的著作を出版したり、説教を行い宗教改革思想を宣教していた代表的人物が、メルヒオール・ホフマン Melchior Hoffman である。バルト海沿岸を回る毛皮商人だった彼は、パンフレットや説教で、間近な終末や信仰洗礼を説き、低地地方に多くの信徒を獲得した。Klaus Deppermann, *Melchior Hoffman. Soziale Unruhen und apokalyptische Visionen im Zeitalter der Reformation*, Göttingen 1979. 著作は書かずとも、口頭で説教を行っていた俗人は無数にいた。ヴェーゼル市の宗教改革黎明期に市内で宗教改革理念を広めた中心人物である毛織工のハインリヒ・クニッピンク Heinrich Knippinck はその一人である。Herbert Kipp, „*Trachtet zuerst nach dem Reich Gottes*“ *Landstädtische Reformation und Rats-Konfessionalisierung in Wesel (1520-1600)*, Kleve 2004, S. 335-340.

出して、福音主義的礼拝式のあり方を明確化していった⁸⁸⁾。しかし、最初はまだドイツ語の賛美歌が存在しなかったため、これを作曲する必要があった。

こうして1523年以降、ルターをはじめとした福音派が、ドイツ語による賛美歌や風刺歌をビラとして出版していった⁸⁹⁾。エッティンガーは、福音派による歌の内容がこの時代出版された説教と共通していることから、双方を出版した層もまた共通していると指摘した。つまり、この時期歌を作った福音派は、基本的に元司祭や修道士のような知識人だったということになる⁹⁰⁾。

福音派によって作られた賛美歌は、賛美歌集にまとめられて出版されることもあった。最初に出版されたルター派の賛美歌集は、ニュルンベルクで印刷された1524年の『八歌集 Achtliederbuch』である。この歌集は既にビラとして出版された8つの歌を集めたものだと考えられているが、そのうち4曲がルター作である⁹¹⁾。1524年にはさらにエアフルトの二つの出版社から『エアフルト綱要』が、ヴィッテンベルクでザクセン選帝侯の宮廷音楽家であるヨハン・ヴァルターによって『合唱賛美歌集』が出版された。ただし、両賛美歌集は、会衆が礼拝で歌うためというより、学校での教育や聖歌隊が歌うための曲が集められていた。1526年の『ヴィッテンベルク綱要』、1529年の『クルーク歌集』はどちらもヴィッテンベルクで出版された会衆用賛美歌集である⁹²⁾。このように賛美歌歌集が次々と印刷され、宗教改革後半世紀で200種類にも及んだという⁹³⁾。当時のビラや歌集の多くは失われたと思われるが、現在まで保存されてきたものだけでも、印刷された讃美歌は2000版を越えており、16世紀のドイツ

88) 徳善義和『ルターと賛美歌』日本キリスト教団出版局、2017年、17-37頁。

89) Inge Mager, *Lied und Reformation. Beobachtungen zur reformatorischen Singbewegung in norddeutschen Städten*, in: Alfred Dürr und Walther Killy (Hg.), *Das protestantische Kirchenlied im 16. und 17. Jahrhundert. Text-, musik- und theologisches Probleme*, Wiesbaden 1986, S. 25.

90) Rebecca Wagner Oettinger, *Music as Propaganda in the German Reformation*, New York/London, 2016, Chapter 1.

91) 木村佐千子「ルターと音楽」『獨協大学ドイツ学研究』74、2018年3月、37頁。

92) 木村佐千子、37-41頁；徳善義和、65-66、81-82頁；Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 45f.

93) 木村佐千子、41頁。

では合計で 300 から 400 万の歌に関する出版物が流通していたと推測される⁹⁴⁾。

しかし、このような歌集ではなくても、パンフレットやビラには韻文で書かれたものが多かったため、スクリプナーは、これらは歌うこと、あるいは吟詠することを想定していたと指摘している⁹⁵⁾。

この時期作られた宗教改革の歌をエッティンガーは、三つに分類している。一つ目は、祈りや説教、聖書、詩編の翻訳、二つ目は宗教改革に関わる出来事を伝えるニュース的なバラッド、三つ目は風刺や論争のための歌である⁹⁶⁾。つまり、宗教改革期の歌は主に、福音主義の教えを伝えること、宗教改革に関わる出来事を伝えること、カトリック教会や聖職者、教皇などの福音主義の敵を風刺・中傷するために作られていたことになる。

こうして福音派による歌が多数出版されると、これらは口伝えで人々の間で広められた。印刷された歌は、多くの場合既存の曲のメロディーを流用したものであったため、音楽の知識がなくても、歌詞を読める者がいれば、歌うことが可能だった⁹⁷⁾。パンフレットの読み上げと同様に、歌もまた、文字を読める者によって読めない人々へと伝えられていった。また、既に人々の間で良く知られていた歌メロディーを使った替え歌は覚えやすいため、人々のあいだで広まりやすかった⁹⁸⁾。

エッティンガーは、歌は、民衆に非常に広がりやすい条件を揃えていたと指摘した。歌は、一度誰かが印刷物を読み、口に出せば、後は口伝えで広げやすかった。良く知られている曲のメロディーが使われることが多く、テキストに韻が使われるなど覚えやすかったため、歌を広めるために印刷物は余り必要ではなかった。また、一度覚えてしまえば、印刷物と違って、当局の取り締まりによって没収されたり、破壊される恐れもなかった⁹⁹⁾。

94) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 46.

95) Scribner, *Flugblatt und Analphabetentum*, S. 69.

96) Oettinger, Chapter 1.

97) Oettinger, Chapter 1.

98) Oettinger, Chapter 4.

99) Oettinger, Chapter 7.

こうして口伝えで広まった歌は、単に宗教改革の思想を人々に知らしめるだけでなく、福音主義の支持者たちが宗教改革を制度化するために行った活動でも利用された。インゲ・マーゲルは、マクデブルク、ヒルデスハイム、ブラウンシュヴァイク、ゲッティンゲン、リューベック、リューネブルクといった北ドイツ諸都市での宗教改革運動で歌が果たした役割の大きさを描き出した。これらの都市では、主に織工などの手工業者によって、はじめは住居の中で隠れながら、その後教会や広場で公然とルターなどの手による福音主義的な歌が歌われた。また福音派住民が、ルターの歌を歌うことで、教会で行われていたカトリックの説教や市内を練り歩く行列を邪魔することもあった。市当局も歌の危険性を認識していたため、1524年4月6日にヒルデスハイム市参事会が公布した禁令のように、ルターに関する歌を禁ずることもあった。しかし、多くの場合宗教改革運動を抑制しようとする市当局の禁令に福音派住民は従わなかったため、こうした歌を伴った福音主義を公言する、あるいは反教権主義的な行為は、宗教改革導入を市当局に受け入れさせるための重要な手段となった¹⁰⁰⁾。

また、賛美歌は、宗教改革が導入された後でも、ルター派の宗教生活にとって重要な意味を持った。第一にルター派教会では、礼拝式における賛美歌の役割がカトリックのミサから大きく変わった。カトリックのミサでは、聖歌を歌うのは聖歌隊や聖職者であり、信徒は基本的に聖歌を歌うことはなかった。しかし、ルターたちの礼拝改革の結果、ルター派の礼拝式では次第に、会衆が声を合わせてドイツ語の賛美歌を歌うようになっていった¹⁰¹⁾。

さらに、賛美歌は、信徒の教育でも重要な役割を果たした。ルター派教会では、信徒教育のために、問答形式で分かりやすく基本的な教えを学べるような教

100) 当該段落を記述する際には、全て以下の論文を参照した。Mager, S. 25-38.

101) カトリックのミサでの歌については以下を参照 Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 42. ルターによる礼拝改革と賛美歌については以下を参照。徳善義和、17-37 頁; J. F. ホワイト著、越川弘英訳『キリスト教礼拝の歴史』日本キリスト教団出版局、2002 年、209-211 頁。西南ドイツ派の都市シュトラースブルクの聖餐式における会衆歌については以下を参照。渡邊伸「聖餐式と会衆歌」前川和也編著『コミュニケーションの社会史』ミネルヴァ書房、2001 年、197-219 頁。

理問答が使われた。ルターは 1529 年に『小教理問答』と『大教理問答』という二つの教理問答を出版しているが、これに先立つカテキズム賛美歌を既に 1524 年に作り始めていた¹⁰²⁾。ルター派の学校でも、生徒たちは賛美歌を歌った¹⁰³⁾。

4.2.3 演劇

この時期は、宗教改革を広めるためのプロパガンダに、演劇も用いられた¹⁰⁴⁾。初期の宗教改革劇には、主に教皇やカトリック教会、聖職者を攻撃する論争的・風刺的な性格が強い謝肉祭劇が多かった。謝肉祭劇とは、四句節が始まる前の謝肉祭の時期に上演された演劇で、主に手工業者をはじめとする都市の民衆によって作劇され、演じられる娯楽的要素の強い演劇であった。多くの場合は酒場や私邸の広間で上演されたが、場合によっては都市の広場など野外で演じられることもあった¹⁰⁵⁾。宗教改革期の謝肉祭劇作者として最も有名なのは、ニュルンベルクの靴屋だったハンス・ザックスである¹⁰⁶⁾。バーゼルのパンフィルス・ゲンゲンバハ Pamphilus Gengenbach によって 1521 年か 22 年に書かれた「骨かじり」や、ベルンのニクラウス・マヌエル Niklaus Manuel によって書かれ 1523 年の謝肉祭に上演された「教皇と聖職者の謝肉祭劇」がその初期の例である¹⁰⁷⁾。このような反教権主義的な宗教改革劇は、南北ドイツ、スイス、オーストリア各地でも作成・上演された¹⁰⁸⁾。しかし、宗教改革劇は、単にカトリック教会批判の手段としてだけでなく、宗教改革の教えを人々に宣

102) カテキズム賛美歌については以下を参照。徳善義和、131-170 頁。

103) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 46.

104) 宗教改革と演劇については以下を参照。永野藤夫、450-900 頁；Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 76-101; Faulstich, S. 174-177.

105) 謝肉祭劇については以下を参照。永野藤夫、314-414 頁；藤代幸一『謝肉祭劇の世界』高知書店、1995 年。

106) ザックスについては本稿註 50 に挙げた文献を参照。ザックスの謝肉祭劇の多くは日本語訳されている。ハンス・ザックス著、藤代幸一、田中道夫訳『謝肉祭劇集』南江堂、1979 年。

107) 永野藤夫、526-533 頁。ベルンの宗教改革と演劇については以下を参照。Glenn Ehrstine, *Theater, Culture, and Community in Reformation Bern, 1523-1555*, Leiden/Boston/Köln, 2002.

108) 宗教改革劇全般については以下を参照。永野藤夫、542-578 頁。

教する役割も果たした。1527年にリーガで学生と市民によって上演されたブルカルト・ヴァルディス Burchard Waldis の謝肉祭劇「放蕩息子のたとえ」は、ルターの義認論をテーマにしたものである¹⁰⁹⁾。

ルターやメランヒトンといった中心的な改革者は、信徒教育のための手段として劇を用いることに比較的好意的であり、宗教改革が各地で制度化された1530年代以降にも、旧約・新約聖書の様々な題材を扱った聖書劇が作られ上演された¹¹⁰⁾。これらの劇の作者はほとんどが牧師、教師、都市上層市民のような都市の知識人たちであり、市参事会の協力によって上演された¹¹¹⁾。

演劇は、個々の場所で、その場に居合わせた者にしかメッセージを伝えることができないメディアだが、演劇の脚本に限れば複製して広めることができた。中世の宗教劇は、ほとんどが読むためではなく、演出台本として利用するために作られた写本で伝えられてきたが¹¹²⁾、活版印刷術による出版物が増加した宗教改革期には劇が出版されるようになった。トーマス・ナオゲオルグス Thomas Naogeorgus が激しいカトリック教会批判を繰り広げたラテン語の宗教改革劇「新悲劇バムマキウス」は、1538年に出版され、その後ドイツ語訳やチェコ語訳も作成され、ドイツだけでなく、ケンブリッジでも上演された¹¹³⁾。しかし、ペティグリーは、演劇が上演された場合と印刷物として読まれた場合では、受け手に与える衝撃は異なり、最も効果が高いのは上演を見て、印刷物を読み、二つのメディアがそれぞれの強みを強化し合ったときだと指摘している¹¹⁴⁾。

演劇は、それ自体台詞などの口頭での言葉、歌、衣装や舞台といった視覚的メディアなど複合的なメディアによって構成されているため、他のメディアの影響を受けることもあった。例えば、ニクラウス・マヌエルは、ルーカス・ク

109) 永野藤夫、592-599 頁。

110) ルターやメランヒトンの演劇観については以下を参照。永野藤夫、542-546 頁；Ehrstine, pp. 1-5. 聖書劇については、永野藤夫、589-671 頁を参照。

111) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, p. 87.

112) 永野藤夫は、1480 年作のユッタ劇を除き、中世宗教劇は全て写本として伝えられたと指摘している。永野藤夫、269-270 頁。

113) 永野藤夫、562-571 頁。

114) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 83f.

ラナハが挿絵を描いた論争的なパンフレット『キリストとアンチキリストの受難』（1521年）のテーマを脚色して、「教皇とキリストの対照」を作ったし、バルトロメウス・クリューガー Bartholomeus Krüger 作の「世界の始めと終わりの新作の傑作劇、キリスト一代記劇」の中では、子どもたちがルターの賛美歌を歌う場面があった¹¹⁵⁾。

4.2.4 日常生活での諸活動

説教、歌、演劇は口頭でパフォーマンスされるメディアではあっても、印刷物として出版されることもあるため研究が進んでいるが、当然のことながら口頭でのコミュニケーション手段はこの三つに限られるものではない。今も昔も、人が生活していれば、自分の周りとの人々と顔をつきあわせ、話しをすることになる。このような日常生活で行われる多様なコミュニケーションが、宗教改革思想の伝播で大きな役割を果たしていたことは想像に難くないが、これらは文字で記録され史料として残ることが極めて稀なので、実証研究が進んでいない。そのため、1984年にスクリプナーが出した口頭でのコミュニケーションによる宗教改革思想の伝播を包括的に扱った論文は、未だにこのテーマを扱う最も重要な研究であり続けている¹¹⁶⁾。

非識字層に印刷物に書かれた宗教改革思想を伝える役割を果たしたコミュニケーション手段として重要視されるのが、読み上げである。ヨーロッパでは、人々が本を読むときには、元々はほとんどの場合音読であり、集団で朗読を聞くという集団的読書の機会も多かった¹¹⁷⁾。中世を通じて、次第に個人が黙読するという読書習慣が浸透していくが、宗教改革の時代にも音読や集団読書が行

115) 永野藤夫、533、662-670 頁。

116) Scribner, R. W., *Oral Culture*, pp. 49-69.

117) 中世における音読から黙読への変化については以下を参照。マルカム・パークス著、月村辰雄訳「テキストの読解、筆者、解釈——中世前期における修道院の習慣」ロジェ・シャルティエ他編『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』、115-133 頁；ジャクリヌ・アメス著、横山安由美訳「スコラ学時代の読書形式」同書、135-156 頁；ポール・サンガー著、横山安由美訳「中世後期の読書」同書、157-188 頁。

われた。つまり、文字を読める者が、読めない者たちの前で宗教改革者の著作を読み上げることによって、宗教改革思想が非識字層にも広められたという。スクリプナーはその例として、1524年にニュルンベルクのマルクト広場で、ある書記がカールシュタットの著作を公然と読み上げ、逮捕された事件を挙げている¹¹⁸⁾。この時期のパンフレットの書き手も、このような読み上げを意識して著作を書くことがあった。例えば、ルター支持者の著述家ヨハン・エバーリン・フォン・ギュンツブルク Johann Eberlin von Günzburg は、1521年にバーゼルで出版したパンフレットで、読者に対し、もし自分で本を読めない場合、貧しい学生に一日分のパンと引き換えに読んでもらうよう呼びかけている¹¹⁹⁾。スクリプナーが挙げている集団読書の例の証言能力に疑問を呈し、ペティグリーは、本の読み上げは聖書の集団読書を除き、史料による証拠に乏しく、宗教改革思想の伝播で大きな役割を果たさなかったと評価した¹²⁰⁾。しかし、マーストリヒトで1534年末から35年1月の間に、再洗礼派が市民の家の中で開いていた秘密集会でベルンハルト・ロートマン Bernhard Rothmann という神学者の著作『復讐について』が複数回読み上げられているなど、史料で確認できる本の読み上げの例はスクリプナーが挙げた以外にも存在している¹²¹⁾。本の読み上げは多くの場合福音主義に対する取り締まりが行われる中で行われていたはずなので、史料での言及が少ないのは当然であり、ペティグリーの批判は的を射ているようには思われない¹²²⁾。

118) Scribner, *Oral Culture*, p. 55.

119) Johann Eberlin von Günzburg, *Alle[n] vnd ietliche[n] christgelöbige[n] menschen ein heylsame warnu[n]g das sy sich hüten vor nünwen schedlichen leren*, Der. XV. bundtgnosß, Basel 1521, fol. 2r; Ludwig Enders (Hg.), *Johann Eberlin von Günzburg, Ausgewählte Schriften*, Bd. 1, Halle a. S., 1896, S. 165; Monika Rössing-Hager, Wie stark findet der nicht-lesekundige Rezipient Berücksichtigung in den Flugschriften, in: Köhler (Hg.), *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*, S. 77.

120) Scribner, *Oral Culture*, pp. 54–55. ペティグリーによる批判。Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 117–120.

121) マーストリヒト再洗礼派の審問記録による。Jos Habets, *De Wederdoopers te Maastricht. Tijdens de Regeering van Keizer Karel V, gevolgd door aantekeningen over de opkomst der hervorming te Susteren en omstreken*, Roermond, 1877, pp. 140–159.

122) ペティグリーは、読み上げが行われた証拠を示す史料が少ない以外に、読み上げ

人びとは単に宗教改革の理念を、受動的に受け入れるだけではなかった。宗教改革のメッセージが広まってくると、それをめぐって各地で議論が巻き起こり、人々に受け入れられたり、拒絶されていった。スクリプナーは、1528年にケルンで、二つの市民の家にしばしば人びとが集まり、飲酒し、聖書を読み、議論していたことを例として挙げている¹²³⁾。議論は、個人の家の中だけでなく、酒場・宿屋でも行われた。近世都市の重要な社交の場であった酒場では福音主義が説教され、対話や議論が行われていた¹²⁴⁾。

口伝えで宗教改革の理念が伝えられる際に重要な役割を果たしたのは、家族や親族関係である。例えば、1535年1月にヴェーゼルで逮捕された再洗礼派35人のうち家族親族が再洗礼派だったと推定されるものは22人(62.9%)であった。そのうち夫婦が7組、親子2組、兄弟姉妹2組、それ以外の親族が2組であったので、宣教において夫婦関係が特に影響力が大きかったことが分かる¹²⁵⁾。

こうした口伝えの宣教で伝えられたメッセージは、人の移動によって遠方に広げられることもあった。スクリプナーは、1520年代後半にヴェルテンベルクやフランクフルトの酒場で聞いたマリアについての話が、ケルンに伝えられた例を挙げている¹²⁶⁾。ケルンの再洗礼派指導者リヒャルト・フォン・リヒャルト Richart von Richardt は、くり返しアーヘンに赴き説教し、かなりの数の住

は基本的に上流階級で行われていた階級性がある娯楽だったこと、文字を読めるという貴重なスキルを無料で提供するはずはないと主張し、本の読み上げに対する批判を行っている。しかし、初期の宗教改革運動には、聖職者、知識人、富裕な市民、手工業者、貧民、女性まで多様な社会階層の者たちが参加していた(例えば、永本哲也『ミュンスター宗教改革』を参照のこと)。特に初期宗教改革の宣教において、社会的地位の違いは大きな障害とはなっていなかったため、ペティグリーの推測には説得力が乏しい。

123) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, S. 67f.

124) Scribner, Oral Culture, p. 57.

125) Bouterwek, K. W. (Hg.), Bekäntnus einiger persohnen, so der Widdertauff und des Munsterischen Unwesens halben alhie zu Wesel im Jahr 1535 eingezogen worden etc. in: *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins* 1, 1863, S. 360–384; Kipp, „Trachtet zuerst nach dem Reich Gottes“に基づき、筆者が算出。

126) Scribner, Flugblatt und Analphabetentum, S. 68f.

民に洗礼を行っていた¹²⁷⁾。

また、福音主義が取り締まりの対象となっていた地域では、周辺の福音主義者達は相互に情報交換をし、福音主義への迫害が厳しくない場所へしばしば移住した。アントウェルペンの仕立て屋ヴィルヘルム・コウゼンメッヒャー Wilhelm Koussenmecher が、クレーフェ公が福音的説教を許しているといううわさを聞いたため、クレーフェ公領の都市ヴェーゼルに移住してきたのはその一例である¹²⁸⁾。

4.3 行動としてのコミュニケーション

宗教改革期には、口頭での言葉や視覚的な表現以外にも、行動によって宗教改革のメッセージが伝えられた。これらの行動は多岐にわたる。これらの行動が示すメッセージは、行動の種類によって様々である。

4.3.1 聖画像破壊

宗教改革が始まると各地で頻発したのが、聖画像破壊であった¹²⁹⁾。つまり、教会や修道院に宗教改革支持者たちが押しかけ、聖画像やステンドグラス、祭壇や聖具を破壊したり略奪したりする行為である。カトリック教会では中世後期には、イエス・キリストや聖母マリア、様々な聖人たちの絵画、彫像、聖遺物に対する崇敬が広く行われ、教会堂は様々な聖画像で飾られるのが常であった。宗教改革者全てが教会からの聖画像撤去を呼びかけたわけではないが、カトリックの伝統的な信仰行為に厳しい批判を行う反教権主義的な態度は共通していた¹³⁰⁾。聖画像や聖遺物に対する崇敬はカトリック教会の信徒の間で浸透し

127) HASTK (Historisches Archiv Stadt Köln) 45, Nr. 15.

128) Bouterwek, S. 361.

129) 聖画像破壊に関する研究の概要や文献は以下を参照。Stefan Ehrenpreis und Ute Lotz-Heumann, *Reformation und konfessionelles Zeitalter*, Darmstadt 2002, S. 82–89; Bob Scribner, *Bilder und Bildersturm im Spätmittelalter und in der frühen Neuzeit*, Wiesbaden 1990; 「特集 イコノクラスム」『西洋美術研究』6, 2001 年。

130) 宗教改革者の中では、マルティン・ルターが、教会での聖画像は信徒の教化のために有用だと認めている。ただし、カールシュタット、ツヴィングリ、カルヴァ

た信仰行為であったため、宗教改革支持者の反教権主義的な感情の発露として、聖画像破壊が様々な場所で実行された。

聖画像破壊は、1520年代に入ってから神聖ローマ帝国やスイスの各地で実行されるようになったが、この広がりには宗教改革運動そのものの始まりと呼応している¹³¹⁾。1521年末から22年1月という最初期に聖画像破壊が行われた場所がヴィッテンベルクであったが、この都市はまさにルターやカールシュタットが司牧をする、宗教改革の中心地であった¹³²⁾。1521年12月にはエアフルトの学生がフランシスコ会修道院の祭壇を、クリスマスの前日には群衆が市内教会のステンドグラスや聖具を破壊し、1522年1月10日にはガブリエル・ツヴィリンク Gabriel Zwilling 率いるアウグスティノ会士たちが、修道院で聖画像や聖具を破壊した。カールシュタットは1521年6月の著作で聖画像批判自体は行っていたものの、教会から聖画像を撤去することを明確に主張し始めるのは1522年1月のことであったので、これらの聖画像破壊は、ルター不在時に指導的な立場にあったカールシュタットや市参事会の意志とは無関係に行われたと思われる¹³³⁾。ただし、これら聖画像破壊は、市参事会が1522年1月24

ンなど他の改革者の多くは、聖画像を偶像崇拜として厳しく非難し、教会からの撤去を求めた。主要な改革者の図像に関する思想的違いについては以下を参照。Randall C. Zachman, *Images and Iconoclasm*, in: David M. Whitford (ed.), *T&T Clark Companion to Reformation Theology*, London/New Delhi/New York/Sydney, 2012, pp. 315–331; 遠山公一「宗教改革と美術 イメージの力」日本キリスト教文化協会編『宗教改革の現代的意義 宗教改革 500 年記念講演集』教文館、2018 年、61–94 頁。

- 131) ドイツで聖画像破壊が行われた時期と場所については、シュニッツラーが一覧を作成している。Norbert Schnitzler, *Ikonomiasmus - Bildersturm. Theologischer Bilderstreit und ikonoklastisches Handeln während des 15. und 16. Jahrhunderts*, München 1996, S. 146–148. ただしシュニッツラーの一覧は網羅的なものではない。
- 132) ヴィッテンベルクでの聖画像破壊については以下を参照。Ulrich Bubenheimer, *Scandalum et ius divinum: Theologische und rechtstheologische Probleme der ersten reformatorischen Innovationen in Wittenberg 1521/1522*, in: *Zeitschrift für Rechtsgeschichte* 90, Kan. Abt 59, 1973, S. 263–342; Schnitzler, S. 237–254; Joseph Leo Koerner, *The Reformation of the Image*, London, 2004, Chapter 6; 元木孝一「美しく、白い壁 ドイツ宗教改革のイコノクラスム」『西洋美術研究』6、2001 年、35–36 頁。
- 133) Bubenheimer, S. 268.

日に市内教会での聖画像撤去を含む箇条書を公布し市内での宗教改革の制度化を進めたり、カールシュタットが同年に聖画像批判の著作を出版する契機ともなった¹³⁴⁾。

ヴィッテンベルクでは、最初の聖画像破壊は支持者が自発的に実行したものだったが、説教師が直接人々に呼びかける場合もあった。1531年4月7日夜にミュンスター市郊外にある聖モーリッツ教会でミュンスター市から来た宗教改革支持者たちが祭壇やその周辺を汚したり、教会の装飾を破壊するという事件が起こったが、これはこの教会の説教師ベルンハルト・ロートマンの説教によって教唆されたものであった¹³⁵⁾。

以上のように、聖画像破壊は、印刷物や説教などを通じて聖人や聖画像崇敬を批判する宗教改革者の思想が人々の間で浸透した結果起こったが、実行の直接のきっかけは、説教師の説教や教唆の場合もあれば、宗教改革支持者たちの自発的な判断による場合もあった。しかし、宗教改革の導入が市参事会によって公認された後は、主に市参事会が中心となって教会からの聖画像撤去を行ったため、単なる民衆による突発的な行動というだけでなく、市当局による制度に基づいた行動の場合もあったことになる。印刷物や説教によりカトリック教会批判を受容した宗教改革支持者が先ず聖画像破壊を行い、それを契機に市参事会による制度的な聖画像撤去が実行されるようになるというパターンはチューリヒなど他都市でも見られた¹³⁶⁾。

聖画像破壊は、ヴィッテンベルクでカールシュタットによる聖画像批判の本格化以前に行われていたように、単に神学者の聖画像に関する神学に基づくだ

134) Koerner, Chapter6.

135) Robert Stupperich (Hg.), *Die Schriften der Münsterischen Täufer und ihrer Gegner. 1. Teil. Die Schriften Bernhard Rothmanns*, Münster 1970, S. 53; 永本哲也『ミュンスター宗教改革』、105頁。

136) チューリヒでの聖画像破壊については以下を参照。Lee Palmer Wandel, *Iconoclasts in Zurich*, in: Bob Scribner (Hg.), *Bilder und Bildersturm im Spätmittelalter und in der frühen Neuzeit*, Wiesbaden 1990, pp. 125-141; 踊共二「チューリヒ宗教改革における聖画像破壊について」『西洋史学』146, 1987年、1-18頁; 元木幸一、40-45頁。

けではなく、独自のメッセージを示すものであった。マルティン・ヴァルンケはミュンスター再洗礼派は、教会内にあるものを無差別に破壊していたのではなく、破壊するものとししないものを区別していたと指摘した。例えば、大聖堂の守護聖人として司教権力を象徴するパウロの像は破壊されたが、ミュンスターの王ヤン・ファン・ライデンが自らの権威の源泉としたダヴィデやソロモンの像は破壊されなかった¹³⁷⁾。聖画像破壊という行為は言葉によってその目的を明示されるものではなく、宗教的次元だけでなく社会的次元にも関わる複雑なメッセージを伝える行為であるので¹³⁸⁾、聖画像破壊がそこに参加した者、それを見た者にどのような意味づけをされたかを探求する際に、ヴァルンケのように破壊されたものとされなかったものを弁別していくという方法で分析を行うことは有用であろう。

4.3.2 請 願

宗教改革思想が多くの人々に支持されるようになると、都市住民は集団で市参事会に対し請願を行うことがあった。その際、都市市民は自分たちの意見を代弁させるためにしばしば市民委員会を作り、要求を箇条書のかたちで集約した。市民の代表が市参事会に市内での宗教改革実行を請願する際には、多くの住民が広場や通りに集まり、要求が受け入れられなければ蜂起するという圧力をかけることもあった¹³⁹⁾。通常市参事会は、多数派住民の要求を拒否するほどの政治的な力を持たないため、市内の秩序維持のために、市民からの要求を受

137) Martin Warnke, *Durchbrochene Geschichte? Die Bilderstürme der Wiedertäufer in Münster 1534/1535*, in: ders. (Hg.), *Bildersturm. Die Zerstörung des Kunstwerkes*, München 1973, S. 83–85.

138) ヴァルンケは、ミュンスター再洗礼派はミュンスターの都市君主であるミュンスター司教、司教座聖堂参事会、都市貴族のような特権階級に関わる様々なシンボルや文書を破棄したと指摘した。Warnke, S. 84–90.

139) このような請願の方法は中世以来の伝統に基づいており、特に北ドイツ諸都市で用いられたことをユーブレヒトが指摘している。Wilfried Ehbrecht, *Verlaufsformen innerständischer Konflikte in nord- und westdeutschen Städten im Reformationszeitalter*, in: Bernd Moeller (Hg.), *Stadt und Kirche im 16. Jahrhundert*, Gütersloh 1978, S. 27–47.

け入れ、市内で宗教改革の制度化を推し進めた¹⁴⁰⁾。多くの都市の宗教改革の制度化は、このような住民による下からの請願によって実現した¹⁴¹⁾。

この都市住民による請願は、市内での宗教改革思想の浸透によって生じたものだが、その際他の都市で起こった騒擾、そしてその中で作成された簡条書から影響を受けた。1525年4月にフランクフルト・アム・マインで騒擾が起こり、4月20日に簡条書が作成されると、その後マインツ、ケルン、ミュンスター、オスナブリュックに騒擾が派生した。ラムシュテットによれば、その際、ミュンスターでは印刷された簡条書が伝わった。他方で、マインツでは印刷物以外の手段で簡条書が伝えられ、オスナブリュックでは直接参照されたかどうかは不明で、ミュンスターの簡条書からの間接的な影響があったという。また、フランクフルトの簡条書は、そのまま利用されたのではなく、各都市で起草された簡条書の叩き台としての役割を果たしたに留まっていた¹⁴²⁾。フランクフルトとマインツの簡条書では共同体による牧師任命や純粋な福音説教義務という宗教改革的な要求が重要な位置を占めていたが、ケルン、ミュンスター、オスナブリュックの簡条書ではほとんど消え去った¹⁴³⁾。また、フランクフルトの簡

140) 都市宗教改革において市参事会は、市内の平和と秩序を守るために、様々な態度を取っていた。ミュンスターの例は以下を参照。永本哲也「ミュンスター宗教改革運動における市参事会の教会政策——1525–34年市内外諸勢力との交渉分析を通じて——」『歴史学研究』876、2011年2月号、20–36、57頁。

141) ただし、全ての宗教改革運動が、民衆の動きによって実現したわけではなく、市参事会や領邦君主が主導する「公権的教会改革」が行われた都市や領邦もあった。渡邊伸『宗教改革と社会』京都大学学術出版会、2001年。また、ベルント・ハムは、民衆的な宗教改革と公権的な宗教改革を対立的ではなく、相互に影響し合うものとして捉えている。Berndt Hamm, *Reformation „von unten“ und Reformation „von oben“*. Zur Problematik reformationshistorischer Klassifizierungen, in: Hans R. Guggisberg und Gottfried G. Krodel (Hg.), *Die Reformation in Deutschland und Europa: Interpretationen und Debatten*, Heidelberg 1993, S. 256–293.

142) Otthein Rammstedt, *Stadtunruhen 1525*, in: Hans-Ulrich Wehler, (Hg.), *Der Deutsche Bauernkrieg 1524–1526*, Göttingen 1975, S. 239–276.

143) 櫻井美幸「帝国都市ケルンにおける宗教改革運動——16世紀前半を中心に——」『ヨーロッパ文化史研究』8、2007年3月、81–94頁。倉塚平「ミュンスター千年王国前史(2)」『政経論叢』明治大学政治経済研究所紀要47巻2/3号、1978年、29–30頁。

条書は最低三箇所て印刷されて多くの場所て知られてはたはずだが、ボン、デュッセルドルフ、ドルトムント、ゾーストなどの都市ては利用されなかつた¹⁴⁴⁾。このことから、印刷あるいは手書きもしくは口頭による伝聞によつてフランクフルトから箇条書が諸都市に伝えられ、都市騒擾や箇条書作成、請願を引きおこしたことが分かる。ただし、都市騒擾が連鎖する際には、単に箇条書だけではなく、おそらく他の都市でも騒擾が起こつてゐるということ自体が、各都市の住民が集団請願に踏み切るきっかけをつくつてゐたと考えられる。

1525 年には中南部ドイツやスイスで農民戦争が起こつてゐたが、農民戦争も、『12 箇条』という箇条書に要求がまとめられ、様々な地域や都市に伝えられることで広がつてゐた¹⁴⁵⁾。『12 箇条』はフランクフルトの箇条書にも影響を与えてゐるため、北ドイツ都市での騒擾も農民戦争から派生したものと言へる¹⁴⁶⁾。このように 1525 年の出来事は、箇条書の作成や騒擾、請願という行動が、いかに他の場所の人々の行動を促す重要な契機になるかを示してゐる。

4.3.3 その他の反教権主義的な行動

都市内部で宗教改革の理念が浸透すると、聖画像破壊や集団での請願以外にも、様々な行動が行われた。聖職者を風刺、嘲笑する行列はその一つである。スクリプナーは、1520～43 年の間に謝肉祭の時期にドイツの都市で 22 の事件が起こり（そのうち 17 件は 1520～25 年）、そのほとんど（22 件中 20 件）で反カトリック的な行列が行われたと指摘してゐる¹⁴⁷⁾。例えば、1521 年 2 月 12 日

144) Rammstedt, S. 240.

145) ブルクハルトは、印刷された『12 箇条』が広がることを通じて都市と農村の住民が協力して民衆運動となつた農民戦争を、「初期市民的メディア革命 *die frühbürgerliche Medienrevolution*」と呼んでゐる。Burkhardt, S. 64-76. ただし、ブリックレによれば、『12 箇条』は全ての蜂起地域で受け入れられたわけではなく、スイスやティロールなどの幾つかの地域では用ゐられなかつた。ペーター・ブリックレ著、前間良爾、田中真造訳『1525 年の革命 ドイツ農民戦争の社会構造史的研究』刀水書房、1988 年、80-82 頁。

146) Rammstedt, S. 244-250.

147) R. W. Scribner, *Reformation, Carnival and the World Turned Upside-down*, in: idem, *Popular Culture and Popular Movements in Reformation Germany*, London/

謝肉祭に、ヴィッテンベルクで、人々が教皇を表す人形を市内で引き回しながら、広場で糞を投げつけたり、街中追いかけ回したりした¹⁴⁸⁾。

これら 22 の事件のうち 7 件では謝肉祭劇が上演されており、そのうち 3 件では謝肉祭劇は行列と結びついていた。1521 年 2 月ヴィッテンベルクでも、学生たちが教皇と贖宥状を嘲笑するラテン語劇を上演していた。この学生による謝肉祭劇は、ルターが前年 12 月に、教皇がルターに向けて出した破門威嚇勅書を公の場で焼き捨てた事件に触発されたものであり、反教権主義的な行動は、宗教改革のメッセージを伝達すると共に、人々の行動を促していたことがここでも確認できる¹⁴⁹⁾。

また、宗教改革思想の浸透によって頻発したのが、カトリックの礼拝式での説教や儀式の妨害である。カトリックの聖職者が説教したり、ミサを挙げているときに、福音主義の支持者たちが教会に入ってきて、声を上げ説教や儀式を妨害したり、聖職者を教会から追い出そうとすることがあった¹⁵⁰⁾。

宗教改革では、カトリックのサクラメントやミサに対する批判も行われた

Ronceverte, 1987, pp. 71f., 78f. なお、スクリプナーは、ミュンスターの謝肉祭で事件が起こった年をグレシュベクの記述を根拠に 1532 年としているが (p. 76f.)、実際にはこの出来事は 1525 年 2 月に起こった可能性が高い。グレシュベクによれば、ミュンスターでは、「スープ喰らい zoppenetters」と呼ばれる若者たちが、修道院に押し入りスープを要求していたが、彼らは謝肉祭でも聖職者を嘲笑するいたずらを行っていた。(C. A. Cornelius, *Berichte der Augenzeugen über das Münsterische Wiedertäuferrelch, Münster 1853*, S. 9; ハインリヒ・グレシュベク著、C. A. コルネリウス編、倉塚平訳『千年王国の惨劇 ミュンスター再洗礼派王国目撃録』平凡社、2002 年、20 頁) この「スープ喰らい」が 1525 年に活動していたことは、ミュンスターの教師が書いたと思われる風刺詩からも確認できる。(Das Ketter-Bichtbok, in: Robert Stupperich (Hg.), *Die Schriften der Münsterischen Täufer und ihrer Gegner. 2. Teil. Schriften von katholischer Seite gegen die Täufer*, Münster 1980, S. 157.) グレシュベクは必ずしも時系列に従い記述していないので、スクリプナーは年代を取り違えたのだと思われる。詳しくは以下を参照。永本哲也『ミュンスター宗教改革』69-70 頁。

148) Scribner, *Reformation, Carnival and the World Turned Upside-down*, p. 72.

149) Scribner, *Reformation, Carnival and the World Turned Upside-down*, pp. 72, 78-80.

150) ゲルツは、このような例として 1521 年のヴィッテンベルクと 1527 年のブラウンシュヴァイクでの事件を挙げている。Hans-Jürgen Goertz, *Antiklerikalismus und Reformation*, Göttingen 1995, S. 16f.

が、カトリックの sacrament を嘲笑する行為も見られた。カトリックではミサで聖別されたパンと葡萄酒は、イエス・キリストの身体と血に実体変化すると教えられていた。しかし、スイスや低地地方では、コルネリウス・フーン Cornelius Hoen やツヴィングリたちが主張した、聖餐式のパンと葡萄酒はイエス・キリストの身体と血を象徴するに過ぎないという教えが広まっていた¹⁵¹⁾。この象徴説を人びとに印象づけるために、ミュンスターの説教師ペーター・ヴィルトハイム Peter Wirthheim が行ったのが、聖体の冒涇である。ミュンスターで宗教改革が導入した後の 1533 年 3 月 27 日に彼は、大勢の信徒の前で聖体を三つに割り、息で吹き散らし、「ここにお前たちの神がいるぞ。」と述べたという¹⁵²⁾。これは、聖体はイエス・キリストの本当の身体であるというカトリックの聖餐論を批判し、パンはパンでしかないという象徴説を、信徒に印象づけようとした行為だと言える。

これらカトリックの聖職者や儀式への嘲笑・冒涇だけでなく、カトリックの儀式や信仰上の決まりを守らないという消極的な態度を取る者も出た。ミサでの聖体拝領や終油の秘跡を拒否したり、四旬節の断食を守らず肉を食べるなどの行為である¹⁵³⁾。これらの行動もカトリックの信仰実践を批判する象徴的な行

151) フーンやツヴィングリの象徴主義的な聖餐論については、A.E. マクグラス著、高柳俊一訳『宗教改革の思想』教文館、2000 年、230-235 頁を参照。象徴説を支持する者たちはしばしば "Sacramentisten" と呼ばれた。Cornelius Krahn, *Dutch Anabaptism. Origin, Spread, Life and Thought*, Scottdale, 1981, pp. 44-79; Daniel Liechty, Sacramentarians, in: Hans J. Hillerbrand (editor in chief), *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, vol. 3, New York/Oxford, 1996, pp. 462f.

152) 永本哲也『ミュンスター宗教改革』、196 頁; Heinrich Detmer (Hg.), Hermann Kerksenbroch. *Anabaptistici furoris Monasterium inclitum Westphaliae metropolim evertentis historica narratio*, Zweite Hälfte, Münster 1899, S. 400.

153) 聖体拝領の拒否についてはユーリヒ公領のギスベルト・ファン・ブレーベルン Gisbert van Brebern の 1534 年の審問記録を参照。Otto R. Redlich, *Jülich-Bergische Kirchenpolitik am Ausgange des Mittelalters und in der Reformationszeit*, Bd. 2, Teil 1, Bonn 1911, S. 856. 終油の秘跡の拒否については、1532 年のヴェーゼルのヘルマン・グルーター Herman Gruter とヨハン・フリダッハ Johan Vrydach の未亡人に関する以下の記述を参照。Kipp, S. 335f. 四旬節での肉食については、ツヴィングリ支持者による 1522 年チューリヒでの出来事を参照。出村彰『人と思想シリーズ=第 2 期 ツヴィングリ』日本基督教団出版局、1974 年、97-103 頁。

為であり、行為そのものがメッセージ性を帯びていたことは言うまでもない。

4.3.4 討論会

宗教改革理念が広がる過程で頻繁に開催されたのが、討論会である。宗教改革と討論会はその始まりから密接な関係があった。1517年にルターがカトリックの贖宥批判を始めると、ルターやその支持者とカトリックの神学者の間で討論会が開かれた。代表的なのは、1519年に開かれたルター、カールシュタットとヨハン・エックの間で行われた討論会である¹⁵⁴⁾。

これら神学者同士の討論会は、直接の参加者にとっても、それ以外の者にとっても宗教改革理念を伝える契機となった。1518年にハイデルベルク大学で開かれた討論会には、後にシュトラースブルクの改革者となるマルティン・ブツァー Martin Butzer が、ライプツィヒ討論会にはメランヒトン、後にアルシュテットやミュールハウゼンの改革者となるトーマス・ミュンツァーも聴衆として参加しており、彼らが宗教改革理念に触れ、支持するようになる際の重要な機会となった¹⁵⁵⁾。また、これらの討論会の議論は、印刷物として出版されることで、討論会に参加していない人びとにも、ルターの主張を伝えた¹⁵⁶⁾。

これら大学で開催された討論会以外に、都市においてより政治的な色合いの強い公開討論会が開かれた。都市内部で福音主義を巡って福音派とカトリックの神学者の争いが激化し、市内で宗教改革導入に対する要求が高まり、信仰問

154) 本稿 2.2 を参照。

155) ブツァーについては、マルティン・H・ユング著、菱刈晃夫、木村あすか訳『宗教改革を生きた人々 神学者から芸術家まで』知泉書館、2017年、70頁、メランヒトンについては、R. シュトゥッペリッヒ著、倉塚平訳『メランヒトン 宗教改革とフマニズム』聖文舎、1971年、39-40頁、ミュンツァーについては、H.-J. ゲルツ著、田中真造・藤井潤訳『トーマス・ミュンツァー 神秘主義者・黙示録的終末預言者・革命家』教文館、1995年、72-73頁を参照。

156) Martin Luther, Disputatio Heidelbergae habita, in: *D. Martin Luthers Werke, Kritische Gesamtausgabe*, 1. Band, Weimar 1883, S. 350-355; Disputatio Iohannis Eccii et Martini Lutheri Lipsiae habita, 1519, in: *D. Martin Luthers Werke, Kritische Gesamtausgabe*, 2. Band, Weimar 1884, S. 250-383; 中村賢二郎訳「エックとルターの討論」中村賢二郎他編訳『原典宗教改革史』ヨルダン社、1976年、59-65頁。

題が市内の平和を脅かすと、都市当局は、しばしば公開討論会を開き、両派の論者に討論をさせることで、市内での分裂を抑えようとした。公開討論会によって双方の主張を聞き、討論会での福音派の主張を市参事会が正当だと認めたことを根拠に市内で宗教改革を導入したのである。その代表は1523年1月と10月にチューリヒで開かれた公開討論会である¹⁵⁷⁾。これら討論会の主張や議論も出版され、都市を越えて宗教改革思想を伝えた¹⁵⁸⁾。

これまで見てきたように、行動は、様々なコミュニケーション手段によって宗教改革理念が伝えられ、多くの人々に受け入れられた結果であり、同時に宗教改革がいかに多くの人々に支持されているかを示し、宗教改革のメッセージと意義を人々に伝え、さらに人々が宗教改革を進めるための行動に踏み出す契機を作っていた。

4.4 視覚的なコミュニケーション

文字を読めない人々は、耳で聞く口頭のコミュニケーションだけでなく、目で見える視覚的なコミュニケーションによっても、宗教改革のメッセージに触れることができた。

157) Bernd Moeller, Disputations, in: Hans J. Hillerbrand (ed. in Chief), *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, Vol. 1, New York/Oxford, 1996, pp. 487-490; 森田安一「チューリッヒにおける再洗礼派運動について——ツヴィングリ主義による宗教改革の一側面」『史学雑誌』76 (11)、1967年、9-20頁。

158) 1523年1月の討論会のためにツヴィングリは、『67箇条』を起草し出版した。Huldreich Zwingli, Aktenstücke zur ersten Zürcher Disputation: I. Die 67 Artikel Zwinglis, in: *Huldreich Zwinglis sämtliche Werke*, vol. 1, Berlin 1905, S. 458-465; フルドリヒ・ツヴィングリ著、内山稔訳「67箇条」出村彰他訳『宗教改革著作集5 ツヴィングリとその周辺 I』教文館、1984年、9-18頁。1月討論会の様子も出版された。Handlung der Versammlung in der Stadt Zürich auf den 29. Januar 1523 (Erste Zürcher Disputation) 3. März 1523, in: *Huldreich Zwinglis sämtliche Werke*, vol. 1, Berlin 1905, S. 479-569. ツヴィングリの著作集は、チューリヒ大学の宗教改革史研究所によってデジタル化されている。http://www.irg.uzh.ch/static/zwingli-werke/index.php (2021年1月31日閲覧)

4.4.1 木版画

宗教改革期の福音派によるプロパガンダで特に重要な役割を果たしたのが木版画であった。この時期福音派によって大量のパンフレットやビラが印刷されたが、それらの多くには木版画の挿絵がつけられていた。この木版画が、宗教改革者が文字を読めない民衆にプロパガンダする際に重要な役割を果たしたことを示した記念碑的な研究が、ロバート・スクリブナーが1981年に刊行した著作“*For the Sake of Simple Folk*”である¹⁵⁹⁾。スクリブナーは、宗教改革のパンフレットやビラのような安価で民衆に手に取りやすい印刷物につけられた木版画が、宗教改革者のプロパガンダで果たした役割を明らかにしようとした。そのために彼は、当時出版された印刷物につけられた多くの木版画を分析し、中世以来の民衆文化で培われてきたモチーフが利用されていたことを明らかにした。ルターの肖像画は聖人のように描かれたし、修道士や聖職者は悪魔のように、教皇はアンチキリストとして描かれた¹⁶⁰⁾。プロパガンダ的な図像が、新旧の教えをルターと教皇、教皇とキリスト、説教師と修道士といった人物として具体化し、二項対立的で単純化された図式を人々の間で作り上げていったという¹⁶¹⁾。その代表的な作品が、1521年にヴィッテンベルクで出版されたパンフレット『キリストの受難とアンチキリストの受難』である¹⁶²⁾。このメランヒトンがテキストを、クラナハが木版画を手がけたパンフレットは、見開きで左頁にキリスト、右頁にアンチキリストたる教皇が対比して描かれている。例として挙げた頁（図1）では、粗末な服を着たキリストが茨の冠を被せられている場面と、豪華な三重冠を頭に乘せた教皇が描かれている。このパンフレットでは全ての見開きで、キリストとアンチキリストたる教皇がいかに反対の存在な

159) R. W. Scribner, *For the Sake of Simple Folk. Popular Propaganda for the German Reformation*, Oxford, 1981.

160) Scribner *For the Sake of Simple Folk*, pp. 14–189.

161) Scribner, *Oral Culture*, pp. 72f.; idem, *For the Sake of Simple Folk*, p. 242.

162) Lucas Cranach, *Passional Christi und Antichristi*, Wittenberg 1521. https://daten.digitale-sammlungen.de/bsb00027007/image_1 (2021年1月31日閲覧)

のかを、視覚的に単純化して示している¹⁶³⁾。このような二項対立や単純化を駆使して描かれた木版画は、人々に反教権主義的なメッセージを伝えるメディアとして重要な役割を果たした。

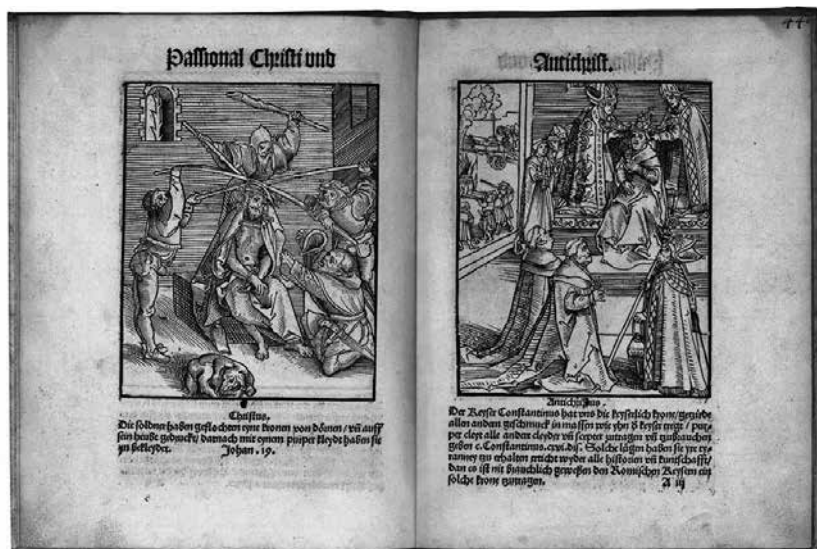


図1 ルーカス・クラナハ（父）『キリストの受難とアンチキリストの受難』1521年¹⁶⁴⁾

他方、視覚的プロパガンダには、教育的な効果を狙ったものもあった。その初期の代表例は、ルーカス・クラナハ（父）による「律法と福音」（1520年代）である¹⁶⁵⁾。（図2）この絵は、ルターの教えを図解したもので、画面の左では旧

163) Scriber, *For the Sake of Simple Folk*, pp. 149–155; 森田安一『木版画を読む 占星術・「死の舞踏」そして宗教改革』山川出版社、2013年、176–179、226–230頁。

164) 出典：Wikimedia Commons. https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Passional_Christi_und_Antichrist#/media/File:Christ_mocked_-_pope_venerated.jpg (2020年3月13日閲覧)

165) 「律法と福音」については以下を参照。Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, pp. 216–218; 森田安一『木版画を読む』237–255頁；青山愛香「ルーカス・クラナハ（父）と宗教改革：「プロテスタント美術」の誕生とその展開（特集 ドイツ美術とプロテスタンティズム）」『言語文化』36、2019年、240–243頁。

約の律法の世界、右では新約の福音の世界が描かれる。律法の世界では人は悪魔と骸骨によって業火へと追いやられているが、福音の世界ではイエス・キリストの胸から出た聖霊（鳩）によって人が救われる様子が描かれている。つまり、この絵は、人は律法ではなく、キリストへの信仰によって救われるというルターの義認論を表している¹⁶⁶⁾。スクリブナーは、このような教育的プロパガンダは、宗教改革の中心的教えを伝えること、真の教会たるルター派教会のはっきりした見解を作り上げようという傾向があると指摘した¹⁶⁷⁾。ただし、彼は、教皇への批判のようなネガティブなプロパガンダと比べ、教育的プロパガンダは効果が小さかったと評価している¹⁶⁸⁾。



図2 ルーカス・クラナハ（父）「律法と福音」1529年¹⁶⁹⁾

166) 森田安一『木版画を読む』、237-242頁。ルターの律法と福音に関する神学については以下を参照。Karl-Heinz zur Mühlen, Law. Theological Understanding of Law, in: Hans J. Hillerbrand (ed. in Chief), *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, Vol. 2, New York/Oxford, 1996, pp. 404f.

167) Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, p. 219f.

168) Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, p. 228.

169) 出典: Wikimedia Commons. <https://commons.wikimedia.org/wiki/>

スクリプナーは、視覚的なプロパガンダは、様々に解釈できるため、明確な教えを伝えることには不適切なメディアだと指摘した。そのため、木版画が宗教改革の理念を伝える際に、非常に重要な役割を果たしたのが、木版画につけられたテキストであった。先に例示した『キリストの受難とアンチキリストの受難』『律法と福音』にも、聖書の引用含めたテキストが加えられ、絵で描かれた内容が何を意味しているのかを説明している。スクリプナーは、多くの場合木版画には説明のためのテキストがついており、メッセージの曖昧さはこれによって補完されたと指摘した¹⁷⁰⁾。そのため、木版画が宗教改革理念を伝える際に、文字が重要な役割を果たしていたことになる。

このようにスクリプナーは、木版画が人々に宗教改革のメッセージを伝える際に重要な役割を果たしたと評価した。彼の論は、その後宗教改革研究者に広く受け入れられたため、現在でも定説的な地位を占めている。

ただし、これに対する批判も存在する。アンドルー・ペティグリーは、図像は民衆にとって必ずしも理解しやすいものではなかったと指摘した。例えばカトリックの聖職者が動物頭で描かれるとき、それが誰を指すのかを理解するには前もってパンフレットを通じた論争でつけられていたあだ名を知っていないとならなかったし、「信仰のみ」のような図像に込められた神学的な意味を理解するためには、図像につけられたテキストを読むことが必要だった。そのため、ペティグリーは、図像は民衆ではなく、既にテキストを通じて図像が扱うシンボルや内容を知っている者を、さらに刺激、教化し、楽しませるという機能を持っていたと評価した¹⁷¹⁾。このようにペティグリーは図像が民衆へのプロ

File:Cranach_law_and_grace_woodcut.jpg#/media/File:Cranach_law_and_grace_woodcut.jpg (2021年1月31日閲覧)

170) Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, p. 244.

171) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 102–127. 彼はさらなる批判点として、16世紀の人々にも目が悪く、図像をはっきり見えない者がいたこと、図像を正確に理解するために必要なテキストを非識字層に向けて読み上げる者は少なかっただろうこと、有名なプロパガンダの図像の多くは安価なビラやパンフレットではなく、高価な書籍につけられており民衆には触れにくかったことなどを挙げている。

バガンダにとって重要な役割を果たしたというスクリプナー説を批判した。

しかし、スクリプナーにせよベティグリーにせよ、視覚的なプロバガンダの受容や効果を史料に基づき実証的に示していないため、どちらの評価がより適切であるかは今のところ判断できない。

4.4.2 絵画

クラナハの工房は、木版画だけでなく、板絵や祭壇画も製作していた。クラナハ工房では、ルター、ルターとその妻のカタリーナ・フォン・ボラ、ルターとフィリップ・メランヒトンを対にした肖像画を制作していた。クラナハは自らの工房で、板絵も大量生産しており、ルターの肖像画も相当な数作成されている。これらの肖像画は、しばしば同じモチーフで描かれる木版画と共に、ルターに修道士、聖人、博士などのイメージを付与し、宗教改革の象徴的な存在だと人々に印象づけることとなった¹⁷²⁾。

また、ルター派教会では、宗教的なテーマを扱った板絵や祭壇画が描かれることがあった。ツヴィングリやカルヴァンたち改革派の神学者とは異なり、ルターは図像の教育的な効果を認めていたため、図像が信仰領域から完全に排除されることはなかった¹⁷³⁾。その代表例は、クラナハが手がけた「律法と福音」を描いた板絵である。このテーマは木版画にもなっていたが、1529 年以降に度々板絵として描かれた。さらに、1539 年には、シュネーベルクの教会の祭壇画として、「律法と福音」やキリスト磔刑図を含む祭壇画が作成された。青山愛香は、それ以外にもクラナハ工房が、「キリストと姦通の女」「子どもたちの祝福」「使徒たちの別れ」などの信仰上のテーマで板絵や祭壇画を作成した

172) ルターたちの肖像画については以下を参照。森田安一「ルター肖像画とルター改革の動向（シンポジウム ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義：五百周年に寄せて）」『史学』88-1、2018 年、81-107 頁；グイド・メスリング著、杉山あかね訳「クラナハーヴィッテンベルクから世界へ」グイド・メスリング、新藤淳責任編集『クラナハ展——500 年後の誘惑』TBS テレビ、2016 年、16-17 頁；同書、217-229 頁；Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, pp. 14-36.

173) 本稿 4.3.1 を参照。

と指摘している¹⁷⁴⁾。

スクリプナーが「教育的プロパガンダ」と呼ぶこうした作品は、特に 1540 年代以降の宗派教会が形成される時期に多数作成された¹⁷⁵⁾。プリジット・ヒールは、ルター派だけでなく、改革派やイングランド国教会を含め、宗派化や「長期の宗教改革」も視野に入れて、プロテスタントの視覚文化について考える必要性を訴えている¹⁷⁶⁾。

板絵や祭壇画は、原則として、その絵画を所有した者、あるいはその祭壇画が置かれた教会を訪れた者のみが見ることができるメディアである。そのため、絵画に内包された宗教改革のメッセージが伝わる範囲や人数は、複製メディアである木版画と比べればかなり限定されることになる。その意味では、絵画は、説教などの一次メディアと同様に、木版画と相互補完しながら、その場にいる人に対し宗教改革のメッセージを伝えるという性格が強いと考えられる。

4.5 文字によるコミュニケーション

宗教改革の時代は、印刷本を通して様々な改革者の思想が、多くの人々に読まれた。印刷本には、挿絵がついているものもあったが、そこに含まれる情報やメッセージを最も正確・厳密に表現していたのは文字・文章であった。ルターなど改革者たちの著作が大量に印刷・販売され、聖職者や知識人、さらには一部の市民たちに読まれ、口伝えや、行動、図像などの他のメディアと相互作用しながら、宗教改革思想が伝播していった。その意味で印刷本が宗教改革思想を広げる重要な起点となっていたことは疑いない。

このように印刷本というメディアと文字によるコミュニケーションは密接な関係があったが、当然のことながら文字によるコミュニケーションは印刷本に

174) 青山愛香、240-247 頁。

175) Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, pp. 220-227.

176) Bridged Heal, *Visual and Material Culture*, in: Ulinka Rublack (ed.), *The Oxford Handbook of the Protestant Reformations*, Oxford, 2017, p. 616.

よってのみ行われるものではなかった。ヨーロッパでは活版印刷術が広まる以前から、聖職者、知識人、官吏、教養市民の間で、様々なメディアによる文字を使ったコミュニケーションが行われており、それは16世紀においても変わりがなかった。

4.5.1 神学的著作

ルターの『95箇条の提題』公開の後、ルターの著作は次々とベストセラーになったが、当然のことながらこの時期神学的著作を出版したのはルターだけではなかった。神聖ローマ帝国では初期宗教改革の時期に急激にパンフレットの出版数が増大したが、これらのほとんどは神学や教会に関するテーマを扱っていた。ハンス・ヨアキム・ケーラーのプロジェクトでは、パンフレットのテーマを五つに区分し、パンフレットで扱われていたテーマを調査した¹⁷⁷⁾。その結果、1518年から30年の間で、「神学と教会」はほとんど全てで扱われており、五つのテーマの中で常に最も高い比率を保っていた¹⁷⁸⁾。

より詳細にパンフレットのテーマを分析するために、ケーラーは30のテーマを設定したが、調査期間を通じて上位10テーマのうち7つ以上が「神学と教会」に関わるテーマであった¹⁷⁹⁾。これらのテーマの時期的な推移を見ると、「学問分野」を扱うパンフレットの比率が1520年以降急激に減少したのに対し、「宗教性と宗教的習俗」（カトリック教会の信仰の仕方に対する批判など）「歴史像と世界観」（アンチキリストイメーじや現在の終末論的解釈、宗教改革者の召命意識、宗教的動機に基づく暴力の正当性や抵抗権など）を扱ったパンフレットの比率が1520年以降高まった。さらに、1517年までほとんどなかった

177) Koehler, S. 253–256. 調査結果を示す表8と9は、S. 273f. 五つのタイプは、「神学と教会」「学問と教育」「社会と文化」「経済」「政治と法」である。この内容調査は、パンフレット全数ではなく、限られたサンプルを使って行われた。

178) Koehler, S. 254f., 273f. 1500年から1530年までの285のドイツ語パンフレットのうち6つ（2.1%）、71のラテン語パンフレットのうち3つ（4.2%）だけが、「神学と教会」テーマを扱っていなかった。

179) Koehler, S. 257.

「宗教改革運動」に関するパンフレットが、1518年以降急激に増加していた。後者三つのテーマは、カトリック教会批判や宗教改革に関わるものであり、宗教改革初期にパンフレットで活発に扱われるテーマが、学問から宗教改革的なものへとある程度変遷したことが見て取れる¹⁸⁰⁾。

このように初期宗教改革の時代には神学や教会、特に宗教改革的なテーマを扱ったパンフレットが大量に出版されたが、他方では、手書きの神学的著作が手渡しで流通する場合もあった。1533年に行われたユーリヒ公領の巡察記録によれば、この時期ユーリヒ公領では、三冊の匿名の著者による神学的著作が手書きで流通していた。このうちの一冊、『スステルンのキリスト教共同体への慰めの手紙にしてキリスト教的訓戒』（1533年）という手紙といっしょにとじられた聖餐と洗礼を扱った著作は、封筒に綴じ込まれ、信徒によって持ち運ばれ、回覧されていた¹⁸¹⁾。

福音主義的な著作の印刷や販売が当局から取り締まられる場合には、このような手書きの著作によって、宗教改革思想が広められることもあった。手書きの著作は、少数の信徒間で回覧されるものであるため、多くの場合それを他の者に手渡しする際には、口頭での宣教も行われていたであろう。そのため、手書きの著作は印刷物と比べると、多くの人びとの手に渡ることはないが、個々の読者に対し訴えかける力は強かった可能性はある。

4.5.2 聖書

宗教改革期に印刷されたテキストで、最も重要で影響力が大きかったのは、言うまでもなく聖書であった。宗教改革は「複数形」で時に呼ばれるような多様性のある宗教運動だったが、プロテスタント諸派は、信仰や規範の基準を

180) Koehler, S. 256, 258, 275. ただしケーラーは、サンプル数の少なさや内容分析の精度が低いことを理由に、これらの結果を量的内容分析の結果としてではなく、研究上の仮説を発見するためのものと見なしており、さらなる量的調査の必要性を訴えている。Koehler, S. 260.

181) K. Rembert, *Die Wiedertäufer im Herzogtum Jülich*, Münster 1893, S. 354–370.

「聖書のみ sola scripta」に求めることでは一致していた¹⁸²⁾。

聖書が信仰の基準とされたことで、宗教改革期には多くの人が自ら聖書を読むことを求めた。中世以来西欧では、ウルガータと呼ばれるラテン語訳聖書が支配的だったが、ラテン語を解さない知識人層以外の人びとも自ら聖書を読むように、俗語に翻訳された聖書が求められた。このような巨大な需要に応えたルター訳のドイツ語聖書が、大ベストセラーになったことは既に見たとおりである。

ただし、聖書の俗語訳は、ルターがはじめて出版したわけではなかった。既に、中世後期から、俗語訳聖書はかなりの数出版されていた。最初のドイツ語聖書は1466年にシュトラースブルクで出版され、その後もルター訳聖書の前に18のドイツ語版聖書が刊行されていた¹⁸³⁾。そのため、ルター訳聖書が出る前に、ドイツ語で聖書を読むことができる環境は既に整っていたことになる。

ただし、これらドイツ語訳聖書とルターによるドイツ語訳聖書には、大きく異なる点があった。それは、ルター以前のドイツ語聖書がラテン語版聖書ウルガータからの重訳であったのに対し、ルターによる聖書は原典から直接翻訳したものだだったことである。ヘブライ語版旧約聖書は、15世紀後半以降イタリアのユダヤ人印刷業者のソンキーノ Sencino 家やヴェネツィアのカトリック印刷業者ダニエル・ボンベルク Daniel Bomberg などによって出版された¹⁸⁴⁾。中世後期から16世紀初めにかけて人文主義者による、文献学的な研究が進ん

182) ベルント・ハムは、宗教改革に多様性を認めつつ、6つの原理については共通していたと考え、そのうちの一つに「唯一の規範の源泉としての聖書」を挙げている。Berndt Hamm, *Einheit und Vielfalt der Reformation - oder: was die Reformation zur Reformation machte*, in: Berndt Hamm, Bernd Moeller und Dorothea Wendebourg, *Reformatiostheorien. Ein kirchenhistorischer Disput über Einheit und Vielfalt der Reformation*, Göttingen 1995, S. 75, 79f. ただし、聖書以外の伝統をどの程度認めるかについては、多様な立場があった。マクグラス、197-200頁。

183) Burkhardt, S. 49. 『書物の森へ』、70-82頁では、アウクスブルクやケルン、ニュルンベルクなど、様々な出版地で出されたルター以前のドイツ語聖書を含む図版が掲載されている。

184) Guy Bedouelle, Editions of the Bible, in: Hillerbrand (ed. in Chief), *The Oxford Encyclopedia of the Reformation*, Vol. 1, pp. 158f.

だ結果、それまで一般的に使われてきたラテン語訳聖書ウルガータには、様々な誤訳や後世の挿入があったことが判明してきた。そこで、人文主義者エラスムスが、複数のギリシア語写本を用い校訂し1516年に出版したのが、ギリシア語版新約聖書である¹⁸⁵⁾。ルターは、これらのヘブライ語、ギリシア語版の聖書本文に基づき、旧約・新約聖書の翻訳を行った¹⁸⁶⁾。これにより、ルター訳聖書は、それまでの俗語訳よりも、原典に忠実な翻訳となった。

ルターによるドイツ語訳聖書の出版によって、聖書はより多くの人びとに読まれるようになった。ただし、聖書は、個々に黙読されるだけでなく、多様なコミュニケーションと結びついていた。宗教改革者たちの説教では、連続で聖書の解釈が行われた。宗教改革期に作られた賛美歌の多くは聖書の章句を歌詞としたものが多かった。特に改革派の賛美歌は、原則として詩編を歌詞とした詩編歌であり、歌と聖書は不可分の関係にあった¹⁸⁷⁾。宗教改革期の劇でも、聖書劇が増えていった¹⁸⁸⁾。また、この時期には、聖職者や信徒が集まり、集団で聖書を読むという集団読書が開かれた。集団読書では、当然聖書は朗読され、聖書についての議論が交わされた¹⁸⁹⁾。このように聖書は、口頭でのコミュニケーションによって人びとに伝えられた。

聖書は、宗教改革運動を推進する様々な行動の原動力となった。宗教改革支持者たちが求めたのは、純粋な神の言葉、つまり聖書の教えに基づく福音的な

185) マクグラス、190-193; 木ノ脇悦郎「人文主義者たちの聖書解釈 エラスムスの校訂版新約聖書を中心に」出村彰、宮谷宜史編『聖書解釈の歴史 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986年、279-310頁。

186) ルターは、ソンキーノ版やボンベルク版など複数のヘブライ語聖書を用いて旧約聖書の翻訳を行った。Bedouelle, p. 158f. 新約聖書翻訳には、主にエラスムス版ギリシア語聖書を用いたが、エラスムスによるラテン語版も参照していた。土岐健治、湯川郁子「『九月聖書』の訳出過程について：ガラテヤ書を用いて」『一橋大学研究年報・人文科学研究』29、1991年、143-172頁。

187) Pettegree, *Reformation and the Culture of Persuasion*, pp. 54-72. 詩編歌の邦訳は以下の通り。日本キリスト改革派教会大会憲法委員会第3分科会編『日本語による150のジュネーブ詩編歌〔十戒・シメオンの歌・マリアの賛歌・使徒信条を含む〕』日本キリスト改革派教会大会出版委員会、2006年。

188) 永野藤夫、589-671頁。

189) 本稿 4.2.4 を参照。

説教を聞くことであった。そのため、宗教改革運動では、支持者が集団で市参事会に、福音主義的な説教師に説教を許すよう請願するのが常であった。また、宗教改革期に開かれた様々な神学的討論会で、改革者たちは、聖書の章句を引用し、解釈しながら、聖書に基づき持論の正しさを主張していた。つまり、請願や討論会といった行動としてのコミュニケーションもまた、聖書と密接に結びついていた。

聖書に出てくる逸話や人物は、宗教改革期に木版画や祭壇画として頻繁に描かれた。その代表例は、ルター訳聖書の挿絵である。この聖書には、クラナハが手がけた木版画挿絵がつけられていた¹⁹⁰⁾。ルターとクラナハは、共に多数のプロバガンダ的パンフレットを出版し、宗教改革期のビジュアルを使ったプロバガンダの手法を確立させた組み合わせである。彼らは、聖書を読むだけでなく、見て理解するものにしたのであった。

また、この時代盛んに作られた聖書劇でも、役者の演技や舞台といった視覚的な効果によって聖書の逸話が伝えられた¹⁹¹⁾。このように聖書は、この時代の視覚的コミュニケーションを通じて、文字を読めない人にも伝えられた。

この時代は、ルターのドイツ語訳聖書の出版によって、かつてない規模で聖書が読まれるようになった時代であった。活版印刷術が登場して以降、聖書は様々な言語で出版され続けていたが、ルター訳聖書は宗教改革期に最も多数販売されたベストセラーになり、数多くの人びとに読まれた¹⁹²⁾。しかし、聖書そのものが読まれるだけでなく、宗教改革期に無数に出版された宗教を題材とした印刷物では、頻繁に聖書の章句が引用された。聖書が、神学的正当性の根拠となると考えられたために、宗教的議論では、各々の論者が聖書の章句を引き合いに出し、解釈することで論を進めていたためである。聖書は、この時代の文字によるコミュニケーションにおいても、中心的役割を果たしていた。

190) ルター訳『新約聖書』の「黙示録」挿絵については以下を参照。Scribner, *For the Sake of Simple Folk*, pp. 169-174.

191) 永野藤夫、589-671 頁。

192) 本稿 3.2 を参照。

このように聖書は、口頭、行動、視覚、文字という四つのコミュニケーション手段と密接に関わっていた。そのため、ブルクハルトは、聖書の印刷は、宗教改革の公共圏に特徴的な書きことば、話し言葉の間の溝を架橋し、視覚的、音声的な部分的公共圏を結びつけていたと評価している。つまり、聖書は、階層やコミュニケーション手段によって分断されていた様々な公共圏、つまり世論を、つなぎ合わせ、より大きな公共圏へと統合していたのだと¹⁹³⁾。

4.5.3 手紙

宗教改革期に印刷以外で重要な役割を果たしたメディアとして、ファウルスティッヒが挙げたのが手紙である¹⁹⁴⁾。16世紀には、離れた場所にいる相手とコミュニケーションを取る場合には、使者や手紙を用いる必要があったため、改革者やその支持者たちは、相互に大量の手紙を送り合っていた。

その際手紙が作るコミュニケーションのネットワークの最も重要なハブとなっていたのはやはりルターやメランヒトン、ツヴィングリやプリンガー、カルヴァンなどの中心的な改革者であった¹⁹⁵⁾。改革者たちは、他の改革者と神学議論や交渉、相互の助言を行ったり、論争相手と議論したり、宗教改革を進めるために各地の領邦君主、官吏、市当局、説教師と情報を交換したり、助言をし合ったりする際に手紙を利用していた。彼らがやり取りする手紙の量は膨大なものであった。現存する手紙だけでも、プリンガーに関わる手紙は1524年から彼が死亡した1575年の間で12000を越えており（プリンガーが書いた手紙が約2000、プリンガー宛てのものが約1万）、メランヒトンが1547年にやり取りした手紙が479あった¹⁹⁶⁾。

193) Burkhardt, S. 60.

194) Faulstich, S. 150–152.

195) 改革者たちと手紙の関わりについては以下を参照。Mark Greengrass, An “Epistolary Reformation”. The Role and Significance of Letters in the First Century of the Protestant Reformation, in: Rublack (ed.), *The Oxford Handbook of the Protestant Reformations*, pp. 431–456.

196) Greengrass, p. 440. グリーングラスの論文の付録には、ルター、ツヴィングリ、メランヒトン、カルヴァン、ピエール・ヴィレ Pierre Viret、ヴォルフガング・カ

この時代には手紙は必ずしも私的なものではなかった。というのは、第一に直接手紙を宛てた相手以外にも、手紙が回覧される可能性があったためである。手紙の送り手が予め意図して回覧させる場合もあれば、手紙を仲介する者や受け取った者が無断で他者に知らせる場合もあった。例えば、ルターは1530年のアウクスブルク帝国議会のための交渉の間にメランヒトンに送った手紙で、彼に送った手紙が周知のものになっていると述べている¹⁹⁷⁾。

第二に、手紙は出版されることがあった。ルターやツヴィングリ、カルヴァンたち高名な改革者の手紙は、収集・編纂・校訂され書簡集として出版された¹⁹⁸⁾。本としてまとめたかたちではなくても、個別の手紙が、「新聞 *Neue Zeytung*」のようなパンフレットに再録され出版されることがあった¹⁹⁹⁾。このように場合によっては、印刷物を通して手紙が不特定多数の読者に読まれる可能性があった。手紙を通じて知識人たちが形成した個人的なネットワークに乗って、宗教改革の理念はヨーロッパ各地に急速に広がっていった。

手紙と印刷物の密接な関係は、手紙の出版だけに見られるのではなかった。この時期、宗教改革の様々な問題をめぐって、知識人の間で多くの論争が行われた。これらの論争は、対立する論者が、お互いに相手を批判する論争的な著作を出版することによって進んだ。しかし、これらの論争は単に著作だけで行われるだけでなく、手紙による直接的なやり取り、または友人知人など周辺の人びととのやり取りを含んでいた。永田諒一は、人文主義者エラスムスとル

ピトー Wolfgang Capito、プリンガーの残存する手紙の年毎の数をまとめた表が付属している。Greengrass, pp. 454-456.

197) Greengrass, p. 437.

198) Greengrass, pp. 437-439. ルターの書簡集は1545年に、ツヴィングリの書簡集は1536年、カルヴァンの書簡集は1575年に出版された。

199) 例えば、ザルツブルク再洗礼派に関する「*Neue Zeitung*」は、複数の文書から構成されているが、その中に手紙も含まれている。Neue Zeitung von den Wiedertäufern und ihrer Sekte, die vor kurzem im Stift zu Salzburg und an anderen Orten entstanden ist, in: Adolf Laube (Hg.), *Flugschriften vom Bauernkrieg zum Täuferreich (1526-1535)*, Bd. 2, Berlin 1992, S. 1573-1579. 2なお、この「新聞」は現在のような定期刊行物ではなく、時事的なテーマを扱ったビラ・パンフレットである。江口豊「ドイツ語圏活字メディアの歴史について：新聞を中心に」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』17、2013年10月、6頁。

ターの間で自由意志をめぐる行われた論争について検討している²⁰⁰⁾。この「自由意志論争」は、エラスムスが1524年9月に出版した『自由意志論』とルターによる25年末の反論『奴隸意志論』、エラスムスによる1526年2月の再反論『猛毒重兵器第一部』、27年9月の『猛毒重兵器第二部』という著作上で行われた。しかし、両者は、この論争の前に各3通ずつ、その後に各1通の手紙のやり取りを行っている。エラスムスは、1521年以降ルーヴアン大学、ヘンリー8世、ザクセン公ゲオルグ、教皇ハドリアヌス6世などのカトリックの有力者から反ルター論を出すよう促されており（ただし彼はこれを断った）、ルターは1524年に、エラスムスが自分に対する反論書を出そうとしていると何者かから知らされ、これを止めるよう求める手紙を出していた。エラスムスはルターの同僚メランヒトンと継続的に手紙のやり取りをしていたが、「自由意志論争」の時期にも書簡でルターについて双方が言及していた²⁰¹⁾。このように著作を中心とした論争は、両者による手紙でのやり取り、さらには周辺の様々な人物の介入込みで進んだものであった。

しかし、手紙を通じて宣教や論争を行っていたのは、知識人だけではない。既に知識人以外の識字層が厚みを増していたこの時代では、非知識人層の俗人も手紙を通じて離れた場所の親族・友人・知人などに連絡を取ることは珍しいことではなく、手紙を通じて宣教や情報交換を行っていた。例えば、1533年から34年には、シュトラースブルクから頻繁に、当時獄中にいた俗人の辻説教師であった再洗礼派指導者メルヒオール・ホフマンからの手紙が、低地地方へと送られていた。この手紙は、再洗礼派の使者が運んでおり、使者たちは口頭でもシュトラースブルクの様子を伝えていた²⁰²⁾。また、再洗礼派の殉教者伝

200) 永田諒一「エラスムスとルターの「自由意志論争」」同『ドイツ近世の社会と教会——宗教改革と信仰派対立の時代』ミネルヴァ書房、2000年、41-79頁。

201) 木ノ脇悦郎『宗教改革の人間群像 エラスムスの往復書簡から』新教出版社、2017年、12-42頁。

202) Obbe Philipps, Bekentenisse Obbe Philipsz, in: Samuel Cramer (ed.), *Bibliotheca Reformatoria Neerlandica. Geschriften uit den tijd der Hervorming in de Nederlanden*, 's-Gravenhage, 1910, p. 124; オベ・フィリップス著、倉塚平訳「告白」倉塚平他編訳『宗教改革急進派』ヨルダン社、1972年、395頁。

『殉教者の鑑』には、数多くの再洗礼派の手紙が収録されている。投獄されていた再洗礼派は、自らの家族や友人、仲間に、手紙を通じて正しい信仰生活を送るよう呼びかけていた²⁰³⁾。

このような手紙のやり取りは、多くの場合使者を通じて行われた。手紙を運ぶ使者は仕事として金銭目的で行う場合もあったが、自ら宗教改革支持者で、使者自身がその場で宣教を行うことも多かった。そのため、手紙と口頭での宣教には密接な結びつきがあったことになる²⁰⁴⁾。

4.6 カールシュタットの「馬車」と四つのコミュニケーション

これまで、宗教改革のメッセージが、四つのコミュニケーション手段と活版印刷術の相互作用の中で広められたことを見てきた。それでは、カールシュタットの「馬車」は、これらのコミュニケーション手段とどのような関係にあったのかを概観する。

一つ目の口頭のコミュニケーションとの関わりだが、残念ながら「馬車」が口頭でどのように伝えられたかについては分からない。「馬車」には、クラナハの手による木版画の上に、多数の吹き出しと神学的主張を伝える文言が付与されていた。ミュールハウプトはドイツ語版の文言の多くは、韻文で書かれて

203) 『殉教者の鑑』の初版は1660年に出版されたが、このタイトルで呼ばれるようになるのは増補改訂された1685年刊行の第二版からである。Thielemann Van Braght and Joseph Sohm, *The Bloody Theater, or Martyrs' Mirror, of the Defenseless Christians, Waterloo*, 2006. 『殉教者の鑑』については以下を参照。山本大丙「『殉教者の鑑』メノー派・アーミシュのアイデンティティの源泉」永本哲也、猪刈由紀、早川朝子、山本大丙編『旅する教会 再洗礼派と宗教改革』新教出版社、2017年、160-167頁。『殉教者の鑑』の獄中書簡については以下を参照。栗原健「獄中書簡に見るネーデルラント再洗礼派女性の信仰」『日蘭学会会誌』26-1（通巻48号）、2001年10月、1-15頁；栗原健「ネーデルラント再洗礼派信徒の獄中書簡——その信憑性と史料価値——」『日蘭学会会誌』29-1（通巻52号）、2004年10月、105-108頁。

204) 永本哲也「1534年2月下ライン地方における宗教改革思想・再洗礼主義の伝播～ヤコブ・フォン・オッセンブルクによるミュンスター再洗礼派の宣教分析を通じて～」『エクフラシス』3、2013年、161-177頁。

いたことを指摘している²⁰⁵⁾。このことは、カールシュタットが、読者がこれらの文言をより良く記憶できるように、口に出して発音することを想定していたことを意味している²⁰⁶⁾。そのため、例えば「馬車」が想定する読者である学生が、「馬車」につけられた文言を口に出し、議論しながら集団で読んだ可能性はある。また、ラテン語版は、ザクセン選帝侯の宮廷顧問官ゲオルク・シュバラティン Georg Spalatin に送られているので²⁰⁷⁾、彼や他の官吏がザクセン選帝侯に口頭で「馬車」について読み聞かせた、あるいは説明した可能性もある。

二つ目の行動としてのコミュニケーションとの関わりを考えると、「馬車」の出版が、1519年6～7月に開催されたライプツィヒ討論会の直前である同年始め（ラテン語版）に出版されたことが重要な意味を持つ。「馬車」は、1518年から続くカールシュタットとエックの間で行われた論争の一部を成す著作であった。論争は主に出版物を通して行われており、「馬車」は既に開催が決まっていたライプツィヒでの討論会の準備の一環として出版された²⁰⁸⁾。このように「馬車」を含めた著作を通じた論争は、カールシュタットとルターが、エックと直接対峙する討論会に結実したのであった。その意味で、「馬車」は、ルターやエックを含めた文書・手紙による論争と、対面での討論が形作る一連のやり取りの一構成要素であり、この時代では印刷物による論争と討論会という出来事が不可分だったことを示している。そして、このエックとの対決が、その後ルターとカールシュタットが、ローマ教皇と決裂し、教皇に対するプロパガンダ的な印刷物を量産する重要な契機となったことを考えれば、「馬車」を含めた印刷物や討論会を通じて広められた福音主義的なメッセージが、その後の宗教改革の進展とプロパガンダに及ぼした影響は大きいと評価できる。

三つ目の視覚的なコミュニケーションは、大判木版画ピラである「馬車」と最も密接な関わりがある。「馬車」は、木版画を利用したプロパガンダ的な印

205) Mühlhaupt, S. 61–64.

206) Roper and Spinks, p. 23.

207) Roper and Spinks, p. 25.

208) Mühlhaupt, S. 60.

刷物の最初期の例であるが、後のパンフレットやビラで用いられた手法が既に用いられている。「馬車」は、画面が上下に分かれており、上段でキリストへ向かう天国行きの馬車、下段で地獄へ向かう馬車が描かれている。キリストへの馬車が画面右から左へと進むのに対し、地獄への馬車は左から右へ向かうなど、馬車の進行方向も正反対である。当然カールシュタット自身の神学的な主張を表すのが上段で、エックをはじめとするスコラ神学者の教えを描くのが下段になる²⁰⁹⁾。このような二項対立的な描写は、その後のプロパガンダ文書で広く見られる表現上の手法であった²¹⁰⁾。

また、「馬車」では、馬車と馬車を引く馬、それに乗る人びとが作る行列を主題としているが、ローパーとスピックスは、これが中世後期や同時代に広がっていた図像の影響を受けたものだとすることを指摘している。一方では、中世後期にイタリアで広まっていたローマの凱旋式、ペトラルカの『凱旋』を描いた図像、さらに16世紀に入りこれらの凱旋式がキリスト教に影響を与えて生まれたキリストの凱旋の図像が、アルプス以北にも伝えられた。他方では、16世紀に入りドイツで出版された神学や人文主義者の凱旋を描いた木版画、そして1517年に出版されたハンス・ショウフェライン Hans Schäufeleinの手による「天国への馬車」「地獄への馬車」という同時代の木版画が、カールシュタットやクラナハが「馬車」を描く際に参考にされたという²¹¹⁾。中世後期や同時代に広まっていたモチーフを利用するというのは、やはり「馬車」の後に次々現れたプロパガンダ的な木版画で広く見られる手法であり、この点でも「馬車」は、プロパガンダ的ビラの先駆的な作品だと言える。

カールシュタットの「馬車」は、基本的には知識人、学生、宮廷人に向けられた作品であったが、そこで使われている手法は、より広い階層を対象としたパンフレットやビラにも見られるものであった。このことは、二項対立や有名なモチーフの採用という手法は、必ずしも民衆向けの印刷物に限定されたもの

209) Roper and Spinks, pp. 31–43.

210) 本稿 4.4.1 を参照。

211) Roper and Spinks, pp. 26–31.

ではなかったことを示している。

ただし、この宗教改革黎明期には、カールシュタットもクラナハも、未だ十分なプロパガンダ的技術を確立させておらず、表現的に洗練されていない部分があった。「馬車」は、視覚的なコミュニケーションを通じて人びとにカールシュタットのメッセージを伝えようというビラだが、画面に出てくる図像的要素が多く、図像だけでメッセージを理解することが難しかった。そのため、「馬車」には図像の上に 53 にも及ぶテキストによる説明がつけられることとなった²¹²⁾。しかし、余りに多数のテキストを図像に配置しようとしたため、本来十字架に掛けられているはずのイエス・キリストが、十字架の後ろに追いやられるなど、図像としての表現に無理が出てきているところがある。そのため、図像を使ってもこの「馬車」は理解しやすいビラとは言えず、カールシュタットは、支持者から上段部分が理解できないと解説を求められたため、4 月に『解説』を書く必要があった²¹³⁾。

四つ目の文字によるコミュニケーションとの関わりでは、「馬車」は木版画の内容を説明するために文章による大量の説明を行っていたことが重要である。「馬車」は視覚的に宗教改革のメッセージを伝えようとする試みの最初期の作品だったが、図像だけでは理解できないため、木版画上の大量のテキスト、さらには別に出版された『解説』といった文字による説明を必要としていた。木版画の意味を明確にするために文字による補足説明が付け加えられるのは、後のパンフレットやビラでも良く見られたが、「馬車」はその中でも特に文字による説明の比重が大きな作品であった。

「馬車」の上部には、木版画上で言い表されたことは、聖書と諸教父によって裏付けられていると書かれていたように、「馬車」は、福音主義的な著作全般で見られるように、その内容の正しさの根拠を聖書に求めていた²¹⁴⁾。そもそ

212) Mühlhaupt, S. 60f.

213) Roper and Spinks, p. 25; 小田部進一、117 頁。これについては、カールシュタットが『解説』の冒頭で自ら述べている。Karlstadt, Auslegung, A 2v.

214) Mühlhaupt, S. 64.

もカールシュタットが「馬車」を作成した目的は、聖書の正しい理解によって、スコラ神学から読者を守り、正しい道へと導くことにあった²¹⁵⁾。また、ミュールハウプトの指摘によれば、上部と下部を分割し、馬車が進む道を正しい者と不信仰者の二つに分けるという「馬車」の基本構成は、神に従う者と逆らう者の道を挙げた詩編1章、命に通じる道と滅びに通じる道を描いたマタイによる福音書7章13-14節という聖書の章句に基づいていた²¹⁶⁾。もちろん、カールシュタットは、「馬車」の中で古代末期の教父アウグスティヌスを高く評価するなど、聖書以外の教父の教えを無視していたわけではないが²¹⁷⁾、「馬車」は、聖書を正しく理解してもらうために、聖書から着想を得て、聖書に基づき描写した、聖書と不可分の作品であった。

「馬車」は、印刷された論争書や討論会によるカールシュタット、ルター、エックの論争の一部を形作るビラだが、この論争は当事者、あるいはその周辺の人物を含めた手紙でも行われていた²¹⁸⁾。サイダーによれば、当初はルターとエックは論争を避けようとしており、1518年5月19日にルターはエックに向けて彼に対抗するものを出版しないように手紙を送っていたし、カールシュタットが自分に反論する書物を出版しようとしていると聞いたエックは、1518年5月28日にカールシュタットに対し、友人として取りやめするよう手紙で頼んだ²¹⁹⁾。しかしこのエックの手紙が届く前の5月に、カールシュタットは、エックへの批判を含む『370の論題』を出版した²²⁰⁾。これに関しルターは、自身とエック共通の友人クリストファー・ショイル Christopher Scheurl に、自分はカールシュタットの論争書の出版を知らなかったし、同意もしていない、

215) Zorzin, S. 139; 小田部進一、118頁。

216) Mühlhaupt, S. 62.

217) 画面上部の天国へ向かう馬車の先頭の馬に騎乗している人物は、アウグスティヌスである。Mühlhaupt, p. 62; Roper and Spinks, p. 31.

218) ライプツィヒ論争前のルター、エック、カールシュタットのやり取りは、サイダーの記述に基づく。Sider, p. 70f.

219) Sider, p. 70f.

220) Sider, p. 71.

平穏を望んでいると弁明していた²²¹⁾。こうしてカールシュタットの論争書が公になったことで、三者の論争が避けられないものになり、その過程で「馬車」も出版されたのである。「馬車」が出版された後の1519年4月13日に、ルターが友人のヨハン・ランク Johann Lang への手紙で、ライプツィヒの神学者たちが「馬車」に激高し、ある者が人目がある中で壇上で破り捨て、別の者がそのことを笑った若者たちを罰したことを伝えている²²²⁾。このように印刷物を通じた論争が行われる裏で、当事者たちと周辺の人びとが手紙のやり取りをしながら、情報交換や交渉を行っていた。

以上のように、カールシュタットの「馬車」は、口頭、行動、視覚的、文字によるコミュニケーションを通じて、そのメッセージを受け手に伝えていた。宗教改革期のメディア環境は既に多様であり、それらは相互に結びつきながら、メッセージを伝播していった。「馬車」が実際にどのような経路で、どれくらいの人々に伝えられ、どのような影響を及ぼしたかについては残念ながら実証的に分かるわけではない。しかし、様々なコミュニケーション手段が、複雑に相互作用しながら、「馬車」に込められたメッセージを広めていったことは間違いない。

5 おわりに

本稿では、宗教改革におけるカールシュタットという人物と「馬車」が出版された1519年の位置づけ、書籍市場や印刷物の性質、4つのコミュニケーション手段と印刷物の関係という三つの側面に注目しながら、カールシュタットの「天国と地獄の馬車」のような宗教改革時代の印刷物についての理解を深めようと試みた。最後に、本稿での検討を概観し、今後の展望について考えてみたい。

カールシュタットは後にルターと袂を分かったために長い間「熱狂主義者」

221) Sider, p. 71.

222) Mühlhaupt, S. 61.

という宗教改革の逸脱者だと評価されてきた。しかし、近年では、多数派教会を形成した改革者だけでなく、以前は宗教改革の敵や逸脱者だとされてきた集団や個人も宗教改革の担い手だと考えられるようになってきた。そのため、カールシュタットの目指した改革も、「複数形の宗教改革」の一つとして位置づけられるようになっている。

「馬車」の出版された1519年は、ルターやカールシュタットが、カトリック教会の枠内で知識人同士の神学論争を行っていた時期である。彼らは、最初からカトリック教会と決裂し、別の教会を組織化していくことを考えていたわけではなかった。カトリックから離脱した「ルター派」教会が確立されるまでも、長い時間を必要とした。カールシュタットの「馬車」は、彼自身もルターも、カトリック教会と完全には決裂していない時期に出版されたため、未だカトリック教会の枠内で行われた神学議論に関するプロパガンダ文書だと評価できる。

1519年という年は、書籍市場や印刷物の性質が大きく変わろうとする過渡的な時期でもあった。15世紀半ばに活版印刷術が確立されたことで、各地で印刷業者が次々と生まれていったが、その多くは間もなく経営危機に陥り、出版業の中心地は限られた大都市に集約されていった。しかし、ルターが著作を次々に出版するようになると、宗教改革的出版物に対する莫大な需要が生まれ、書籍市場が活性化した。さらに、ルターのお膝元のヴィッテンベルクはヨーロッパの印刷業の中心地へと急速に成長した。そして、市場に流通する印刷物の多くが小型化し、安価になり、ドイツ語で書かれるようになった。これによって、聖職者や知識人だけでなく、より幅広い層に向けられた印刷物が主流になっていった。カールシュタットの「馬車」は、ヴィッテンベルクの出版業が急成長し始めた時期に、最初はラテン語、その後ドイツ語で出版された図像を主としたビラであり、主に知識人を想定読者にしつつ、民衆も意識して書かれた。その意味で、市場のあり方や出版物の性質が急激に変わる過渡期に出された出版物だったと言える。

「馬車」に限らず、宗教改革期の印刷物は、説教や歌、演劇、本の読み上げ、

議論などの口頭のコミュニケーション、聖画像破壊や請願などの行動としてのコミュニケーション、木版画や絵画などの視覚的なコミュニケーション、神学的著作や聖書、手紙などの文字によるコミュニケーションと相互作用しながら、そのメッセージを人々に伝えていた。「馬車」に込められたメッセージもまた、これら4つのコミュニケーション手段と結びついて、読者に伝えられた。「馬車」のテキストの多くは韻文で書かれており、口頭で発音されることを想定されていた。「馬車」は、カールシュタットがヨハン・エックとの論争のために出版したビラだったが、「馬車」を含めた印刷物は、手紙や討論会という文字や行動によるコミュニケーション手段と共に、福音主義的メッセージを伝えていた。クラナハの手による木版画が「馬車」というビラのメッセージを伝える際に最も重要な役割を果たしたが、そこで用いられた二項対立的な描写や当時広まっていたモチーフを利用するというプロパガンダ手法は、図像のメッセージをより効果的に伝えるものであった。しかし、図像は単体で正確に神学的メッセージを伝えることが難しいため、「馬車」では木版画上の大量のテキスト、さらには別に出版された解説という文字によって、見る者の理解を促していた。

このように、「馬車」のような図像を含んだ印刷物に関する分析には、図像やテキストに込められたメッセージだけでなく、その印刷物を作成した者の位置づけや、印刷物としての性質、メッセージを伝える際に用いられる複雑なコミュニケーション手段の相互作用といった様々な観点を用いることができる。

以上のような印刷物の分析で、今後重要になると思われる課題として、印刷物のメッセージが伝わった経路を実証的に明らかにすることが挙げられる。図像やテキストによって印刷物に込められた宗教改革のメッセージは、4つのコミュニケーション手段と相互作用しながら伝えられたが、その相互作用の組み合わせパターンは無数に存在していたはずである。その際に、どのような組み合わせが多く用いられたのかについては、現在まで十分明らかになっているようには思われない。これを明らかにするには、様々な印刷物のメッセージの伝播方法を実証的に明らかにする事例研究の蓄積が必要であろう。

もう一つの課題としては、宗教改革のメッセージを伝える際に、印刷物は他のメディアと比べてどのような効果があったのか、もしくは複数のコミュニケーション手段とどのように結びついた場合、より効果的であったかを明らかにすることである。宗教改革思想の宣教の際に複数のコミュニケーション手段が複合的に用いられたことは多くの研究者が認めているが、説教のような口頭のコミュニケーションと印刷物ではどちらが効果が大きかったかについては、意見が分かれている。しかし、各メディア、もしくはその相互作用が、宣教でどのような効果を上げていたのかについては、これまで実証的に明らかになっていない。受け手の反応は史料に余り出てこず、断片的にしか把握できないため、宣教の効果の評価は極めて難しいが、史料的困難を越えて取り組まねばならない重要な課題である。